

広報

# 佐久

SAKU  
Public Information

2012 平成24年

# 別冊

<http://www.city.saku.nagano.jp>



- 佐久の先人検討委員会 委員長からのあいさつ、委員名簿 ..... 2 p
- 事業の目的、選定の経過 ..... 3 p
- 佐久の先人（第一次選定18人） ..... 4 p～39 p
- 佐久の先人（第二次分）の選定、先人の推薦受付 ..... 40 p

佐久の先人検討委員会・佐久市教育委員会

## はじめに

この度、皆様に佐久の先人を紹介するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

県歌「信濃の国」で四つの平の一つとしてうたわれ、豊かな自然に囲まれた佐久の地には、古くから受け継がれてきた人々の営みがあり、独自の伝統や文化が育まれてきました。

その長い歴史の中からは、全国や世界で活躍した人、また、地域の発展に尽した人など多くの先人が輩出されてきましたが、佐久にゆかりがあるにもかかわらず、あまり市民に知られていない人物も多く含まれています。

佐久の先人検討委員会では、こうした人物にも光を当て、先人たちが残した多くの業績を市民の皆様にご存知いただき、永く後世に語り継いでいくことで、ふるさとへの愛着や誇りの気持ちが高まることを期待し、長時間にわたる熱い議論や、検討作業を繰り返してまいりました。

その間、執筆者をはじめ、委員・監修者、関係各位には多大なるご尽力およびご協力をいただき、ここに第一次分の先人 18 人の紹介文をまとめるに至りました。編集にあたった事務局も含め、この場を借りてお礼申し上げます。

最後に、この佐久の先人検討事業が、ふるさとの魅力を再発見し、関心と理解を深めるきっかけとなれば幸いに存じます。

平成 24 年 7 月

佐久の先人検討委員会

委員長 中嶋 長市郎

## 佐久の先人検討委員会

佐久の先人検討委員会は、平成22年に設置され、先人候補者の選出や選定に関する検討を行うとともに、先人紹介文のほか、公開・活用方法等の検討も行っています。

### 委員

中嶋 長市郎（委員長） ・ 吉川 徹（副委員長）

小林 収 ・ 佐々木 都 ・ 佐藤 治郎 ・ 清水 宣子

高橋 武彦 ・ 中澤 道保 ・ 増田 友厚

### 監修者

井出 孫六 ・ 伊藤 純郎 ・ 中村 勝実（敬称略）

## ●事業の目的

佐久の先人検討事業は、佐久市にゆかりがあり、全国や世界を舞台に活躍した人、佐久地域の発展に尽力した人など、多くの先人の業績やつながりを紹介し、語り継いでもらうとともに、ふるさとへの愛着や誇りの気持ちを高めることを目的としています。

この事業を展開することにより、市民が地元の新たな魅力を知り、永く語り継いでもらうとともに、事業を広く周知する事で、佐久に興味を持って市外から訪れる人を増やし、交流人口の創出につなげることも目指しています。

## ●選定の経過

佐久には多くの先人が残した業績があり、これは形や風景として残されているものや、人々の間で語り継がれているものもあります。

小さな農村が集まった佐久には、私財を投じて事業に取り組んだ人、大勢に流されることなく信念を貫いた人、またこうした人たちを受け入れ支えた地元の人達など、独特の風土があります。

佐久の先人検討委員会では、こうした佐久の風土に育まれた多くの先人候補者の中から、文献や市民から寄せられた情報なども参考として検討を重ね、紹介する先人を選定しています。

4 ページ以降で紹介する下記の先人18人は、第一次分の先人として選定されました。

### 佐久の先人（第一次選定18人）

|          |       |     |         |       |     |
|----------|-------|-----|---------|-------|-----|
| 市 川 五郎兵衛 | ..... | 4 p | 桜 井 弥一郎 | ..... | 22p |
| 臼 田 丹右衛門 | ..... | 6 p | 川 村 吾 蔵 | ..... | 24p |
| 市 川 代治郎  | ..... | 8 p | 小 林 多津衛 | ..... | 26p |
| 大 給 恒    | ..... | 10p | 田 河 水 泡 | ..... | 28p |
| 神 津 邦太郎  | ..... | 12p | 丸 岡 秀 子 | ..... | 30p |
| 佐 藤 寅太郎  | ..... | 14p | 山 室 静   | ..... | 32p |
| 大 井 富 太  | ..... | 16p | 竹 内 好   | ..... | 34p |
| 神 津 藤 平  | ..... | 18p | 若 月 俊 一 | ..... | 36p |
| 比田井 天 来  | ..... | 20p | 井 出 一太郎 | ..... | 38p |

先人の紹介文作成にあたっては、なるべくエピソードや写真を交え、読みやすさを考慮しております。  
文献・資料や寄せられた情報を基に、正確な記述となるよう心掛けておりますが、万が一内容に事実誤認、問題等がございましたら、文化振興課までご連絡ください。



## 佐久の先人たち①

### 用水開発の祖

# 市川五郎兵衛

(1571~1665年)

米は古くから日本人にとって、いちばん大切な食べ物であるが、水がないと稲が育たない。五郎兵衛は多くのお金と砥石山のトンネルを掘る技術をつかって用水を完成させた。

#### ●生いたちと信念

市川五郎兵衛眞親は、一五七一（元亀2）年に上州（現群馬県）南牧に生まれ、子どもの頃は市左衛門と呼ばれていた。その頃の日本は戦国時代のさなかで、武士たちは自分の領地を広げようと争いを続けていた。市川一族は甲州（現山梨県）の武田信玄のもとで戦って手柄をたて、佐久の蓬田・桑山などの土地をもらっていた。しかし、いく度かのはげしい戦いで、祖父や一族の人々は死んだり、けがをするなど悲しいできごともあった。

#### ●用水開発の苦勞

信玄が亡くなり、その子の勝頼が織田軍によって滅されると、市川一族は南牧に帰って、山の畑で麦やコシニヤク玉などを栽培していた。村はV字型の急な斜面ばかりで、田をつくる土地がなかったため、砥石を採掘し、それを売るなどして暮しをたてていた。徳川家康が江戸に入ると、守りを固めるために、市川氏にも仕官するようにと手紙を送ってきた。父の眞久は二歳の五郎兵衛を一五九三（文禄2）年に江戸城へ出府させた。家康の前に出た五郎兵衛は、「志すでに武に非ず、殖産興業にあり」（武士になつて戦つより、産業をさかんにすることにつとめたい）と答えたため、「家康の領土では土地の開拓を認める」という朱印状を家康から与えられたと伝えられている。

五郎兵衛は朱印状を持って佐久に入ると、まず湯川の水をせき止めて三河田用水（約四・五キ）をつくって田を開き、続けて常木用水をつくって市村新田を開いた。さらに新田を開発するため、千曲川の西に広がる矢島が原に水をひこうと考えた。はじめは田田から水を取り入れようとしたが、谷が険しく水をひくことはできなかった。

そこで南にそびえる蓼科山の中腹に分け入り、岩の間から湧き出していた「五斗水」を岩下川（現細小路川）に落とし、春日の湯沢川（現鹿曲川）との合流点

をせき止めて水の取り入れ口をつくり、矢島が原まで水路（堰）をひこうとした。この計画に小諸藩が言いがかりを付けたが、家康の朱印状を見せると許さなければならなかった。

堰は取り入れ口から鹿曲川に沿って、山の斜面の岩をノミで削って掘り進められた。片倉と布施の間の山は、三三七歩のトンネルを掘り、川や沢を横切る場所は木の桶を渡して水を流すことにした。



五郎兵衛新田を流れる築堰  
(昭和31年頃 碓氷高氏撮影)

トンネルは山の東と西の両方から掘り進められたので、うまくつなげるには高い技術が必要であった。五郎兵衛は南牧村から砥石山で働いていた人々を呼びよせ、測量の仕方やノミの使い方を佐久の人々にも教え、これを見事成功させた。

トンネルの底には、砂がつまらないように波つつ形につくられた技術がほどこされていた。暗いトンネルの中には灯りを置いたあとも今でも残されている。



## ●用水の工夫と技術

水の流れを良くするためには堰に傾斜をつけなければならぬ。五郎兵衛たちは、夜になると大きなたらいにローソクを浮かべたり、山の斜面に提灯を並べたりして印をつけ、傾斜を測ったと伝えられている。

トンネルを出た堰は東へ下ると、布施川を長い木の樋で渡し、布施川の東を百沢の近くまで進むと、山の斜面をまわり、丘を横切りながらくねくねと上原まで掘り進められた。

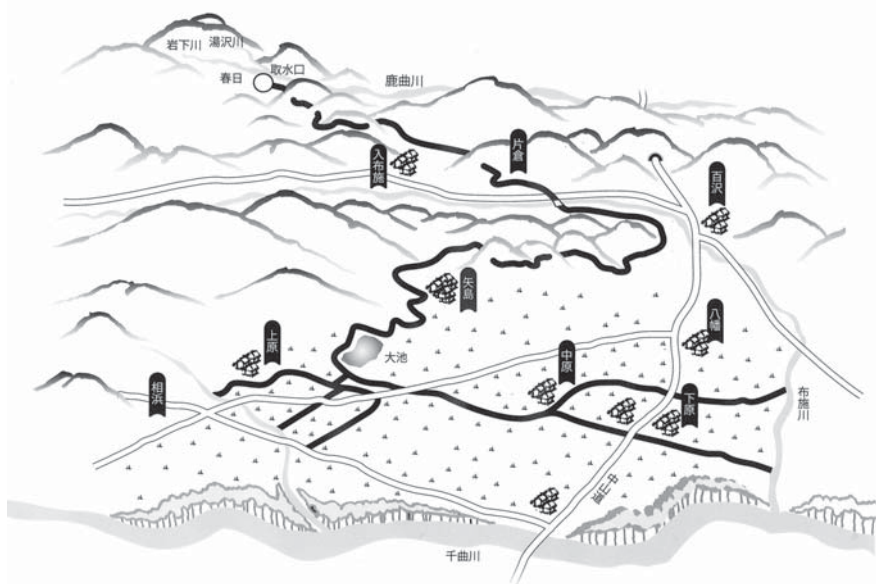
矢島が原の全域に水をいきわたらせるために、堰は高い所を北へ向って掘られた。ところが上原と下原の間に低い所があつて、水を通すことが出来なかつた。

そこで土をよく固めた高さ約二・四メートルの土堤の上に幅一・五メートルの堰を掘った土樋（築堰）を築いたが、水が漏れたり、穴が開いたりしてしまつた。人々は芝の根を切りとったものを重ねて木の杭を打ちこみ（でんがく積み）、真綿をちぎって流して穴をふさぐ（わとづみ）などの工夫をした。これらは五郎兵衛の妻きよの助言によるものと伝えられている。

一六二三（元和9）年に掘り始めた堰は、約四年後の一六二七（寛永4）年に完成した。五郎兵衛は南牧の人ばかりでなく、佐久の人々にも分け隔てなく開墾を勧めたので、田んぼはみるみるうちに広がった。

草原だった矢島が原には新しい田が開かれ、四年間

で四三九石（一石は一八〇石）もの米がとれるほどになった。その後八七〇石ものおいしい米がとれるまでになり、上原・中原・下原に新しい村が生まれた。長さ二〇キロメートルの堰をひらくための大金は、砥石を売った金が使われたが、足りなくなつてしまつた。困りはてた五郎兵衛は、千両箱に砥石をつめて、馬で村に運んで、村人たちを安心させたという逸話が今も語りつがれている。



北西方向から見た五郎兵衛用水の概略図

## ●五郎兵衛の徳をしたう村人

七〇歳を越えた五郎兵衛は、土地や用水の権利を求めることはせず、故郷の南牧に帰った。しかも用水をつくるために借りた一四一二両を返すために、砥石山を浅草の商人に売ってしまった。その後は南牧に残った人々の面倒を見ながら、仏教の教えを大切にし、自然の中でゆったりと暮らした。

一六六五（寛文5）年九月九日、五郎兵衛は九四歳で亡くなり、遺言によつて矢島が原の用水や田んぼが見わたせる救里が丘（木瓜峯）に葬られた。村人たちは五郎兵衛の徳をしたつてその場所に真親神社を建て、村の名前を五郎兵衛新田村とした。

五郎兵衛新田の人々は堰を守り、大切な水を公平に分ける五郎兵衛の教えを守つて、米づくりにばげんだ。五郎兵衛用水の成功を見た佐久の人々は、その後塩沢八重原、御影などの台地に堰をつくつて美田を開いたので、佐久は米どころと言われるようになった。

五郎兵衛用水のトンネルは今も残り、朱印状など当時を語る品々は、五郎兵衛記念館で見ることができ

（小林収）

### 参考文献

伊藤一明『五郎兵衛と用水』（財信州農村開発史研究所）

## 佐久の先人たち②

### 佐久鯉を改良した

うす だ たん に も ん

## 臼田丹右衛門

(1776~1857年)

海から遠い佐久では、鯉は生きたまま料理できる食べ物として大事にされてきた。その鯉と淀川から運んだ鯉を交配させて、おいしく栄養のある鯉を育てた、佐久の人々の努力と工夫のあと。

### ●生いたちと学び

臼田丹右衛門光貞は、一七七六（安永五）年に下桜井村（現佐久市桜井）の源五右衛門の子として生まれ、幼名は銀治郎と呼ばれていた。臼田家は村の名主をつとめ、下県知行所（代官役所）にも勤めたこともあった。丹右衛門は父から剣道を習い、さらに一信流の居合（片膝を立てて素早く刀を抜き払って、敵を斬りた

おす術）の免状を受けたほどであった。

その後、和歌を学ぶために京都の歌人を訪ねていたが、その時すばらしい呉服を見て、信州へ運んだ。い

く度か京都方面を訪ねているうちに、淀川に泳ぐ大きな鯉と出会うことになる。

### ●淀鯉を佐久へ運ぶ

千曲川には古くから鯉が泳ぎ、秋には鮭がのぼってきていた。しかし千曲川は流れが速いので、鯉は太っていないかった。それに比べて淀川の鯉は、肉が厚くておいしく、丹右衛門をおどろかせた。

彼は「淀鯉を佐久まで運んで増やし、佐久の人々に食べさせたい」と考えるようになった。

屋敷の中に数十坪（一坪は約三・三平方メートル）の池を掘って準備をしたが、生きたまま佐久までどのように運んだらいいのかおぼろしかった。

七代目の臼田元則家には、天保の頃（一八三〇〜一八四三）から明治のはじめまでの「鯉大宝恵帳」、「鯉仕入並売払覚」などの古文書が残されている。しかし、鯉をどのように運んできたかについては、書かれていない。そこで江戸時代における中山道の様子から鯉の運び方を考えよう。

「佐久鯉発祥の地」の石碑には、「数尾の親鯉を持ち来りて…」と書かれていることから、鯉は大きな桶に水と鯉を入れてふたをし、縄でしばって棒を通して二人でかついだのである。峠の坂道では馬につけて運んだと考えられる。鯉が死なないように、途中で水を入れなければならなかった。京都から佐久まで、約

九〇里（約三六〇キロメートル）の宿賃や人足賃を合わせると、たいへんなお金がかかった。

（弘化元年頃の人足賃から計算すると五〇〇〇文くらい）

### ●池で鯉を飼う

丹右衛門は運んできた淀鯉を池にはなし、「源助びるも」（ヒルムシロと呼ばれる水草）の中に卵を生ませて、鯉の子を育てた。しかし、千曲川や片貝川の水がためたかったためか、「鯉の育ち方はあまり良くなかった」という話が伝えられている。



かつては鯉の飼育や越冬に使う池を各戸でもっていた。

食べごろとなった。

「鯉大宝恵帳」には「さなぎ一俵・二俵」という書きこみが見られ、鯉の餌としてさなぎが使われていたことがわかる。繭から糸をとったあとに残るさなぎを

さいわいな

ことに、桜井には多くの泉がわき出て、真冬でも一三度と暖かったため、鯉は冬を越して二年〜三年で大きく育ち、

食べた鯉は、脂肪分が多くて、おいしい味をつくり出した。鯉は何でも食べるので、さなぎのほかにもすま(小麦の皮) やいもなども与えると大きく育った。鯉を大きく育てた丹右衛門は、一八五七(安政4)年十二月十日に八二歳で亡くなった。

## ●鯉を育てた佐久の人々

丹右衛門のほかにも佐久の鯉を育て、おいしい料理をつくり上げた人々がいた。文政(一八一八)の頃、岩村田藩の御用達をつとめていた野沢の並木七右衛門は、殿様が太坂城加番をしていた時、「珍魚」(淀鯉か)を賜って佐久へ持ち帰った。

跡部の茂原猪六の日記によると、一八四二(天保13)年に田に飼った鯉取りをし、一八四四(天保15)年八月十三日には「鯉六七枚」と書いている。

鯉が素晴らしい食べ物であることを知った佐久の人

々は、池ばかりでなく広い田んぼに鯉を放して、鯉をたくさん飼った。猪六日記にはその頃の料理として、鯉吸物(鯉こく)・皮干切・さしみ(あらい)・すくみ・甘煮・ぬたなどの名前が書かれ、佐久の人々によって、いろいろな食べ方がつくいだされていた。

海から遠い佐久地方では、海の魚といえば馬によって運ばれてきた「ひもの」や「塩づけ」が多く、生のまま料理できる鯉は、おいしいので家で飼う人が増えた。湧水や用水の近くの家では池を掘って鯉を泳がせ必要な時に食べられるようにした。といっても鯉の数は少なかったため、婚礼や葬式など特別な時のごちそうに使われた。そのつえ、鯉の生血やキモ(たんのう)は薬となることもわかってきて、病気になる人が鯉を食べると元気になる、お産の後、乳が出ないお母さんが食べると乳が出るようになった。

明治末から大正にかけて、製糸場から出るさなぎで、桜井村ばかりでなく、野沢などを中心に水田養鯉がさかんになった。さらに佐久鉄道の開通によって鯉が東京に運ばれると、「おいしい佐久鯉」として全国的に有名になった。

交通が発達し、世界の魚が食べられるようになったが、鯉料理は多くの料理店や旅館で、佐久を代表する料理として親



田田養鯉の図(佐久市教育委員会蔵)



平拾いと呼ばれる鯉のとりあげ(上)  
宮内省買い上げとなり出荷される佐久鯉(下)

しまれている。

臼田家七代目の元則氏と同志たちは、桜井の民家を使って、佐久鯉料理「丹右衛門」を開き、長い間佐久の人々が育ててきた家庭の味を受けつぎ、地元の人々や観光に訪れた方々に、佐久鯉を味わってもらいたいと願っている。

(小林収)

## 参考文献

- 『佐久鯉の歴史』淡水魚研究会
- 『佐久鯉特集』『佐久』佐久史学会
- 『臼田元則家文書』
- 『笹沢家文書』



## 佐久の先人たち③

### 旧中込学校を建てた棟梁

いち かわ だい じ ろう

## 市川代治郎

(1826～1896年)

江戸末期、築地西本願寺修復で自信を得た市川代治郎は、アメリカにわたって洋風建築を学んだ。帰国後郷里の学校建築の設計・施工を引き受け、現存する洋風学校建築では最も古い中込学校を完成させた。

#### ●欧米の建築技術を学ぶ

市川代治郎は、一八二六（文政9）年八月五日南佐久郡下中込村（現佐久市中込）石神の名主市川八郎右衛門の二男として誕生し、幼名は林藏といった。

二二～二三歳、一八四八（嘉永元）年前後の頃、代治郎は思つてゐるあつて宮大工を志し、京都本願寺の棟梁水口若狭守に入門を許され、ご用役大工の鑑札を受けるなど名工の名の高かつた隣村の野沢中小屋の小林源藏昌長主之助に弟子入りし、大いに腕を磨いた。

源藏が東京築地西本願寺修復の棟梁に推挙され、他

の工匠を指揮した際、代治郎は脇棟梁の重責を担っていたが、一八五八（安政5）年八月、工事半ばで師匠が急死、代つて代治郎が指揮をとり工事を完成させた。

この際知り合つたアメリカ人ケルモルトに見込まれて雇われ、一八六九（明治2）年三月に四四歳で渡米、カリフォルニア州のスクラメントで欧米の建築技術を学び、一八七三（明治6）年六月に帰国した。

その頃、中山道板橋から荒川を渡るのには渡し船だったが、ここに埼玉県と東京府の間で戸田橋を架ける計画があることを知り、代治郎はアメリカで学んだ新技術「吊橋」による架橋を、大久保一翁東京府知事に上申し、埼玉県と掛け合つてほしいと提案している。

また、付属の建言書では「ご用仰せ付け頂ければもう一度スクラメントに行つてしっかり調査してきます」と言い切り、相当の自信、覚悟の程を示している。

結果として、代治郎の吊橋案は採用されず、木橋による架橋案に決定してしまつた。幻の吊橋計画絵図面、東京府への上申書の下書きは現在旧中込学校に保存、展示されている。

近現代建築史が専門の藤森昭信博士は、「戸田橋の設計図は斜張材の張り方、アンカーの入れ方など細かいところまで本式」であり、この後建設された中込学校については、「全国にも例が少ない縦長・ベランダ付きの形式をとっており、同時代のアメリカの地方の

小学校が、縦長・ベランダ付きを特徴としている事実と共通している」とし、「欧米に学んだ日本で最初の大工になるのでは」と述べている。

#### ●生まれ在所に祭り屋台

帰朝後、妻子を村に置いたままだった代治郎は、感謝の意を込め、自らの手で鶴と亀の飾りや、石神の「石」という字を彫り込んだ祭り屋台を村に寄贈した。この屋台の車輪や飾りの一部には白ペンキ、組み子は漆塗り、屋根には障子をはめるなどの特徴があり、現在は旧中込学校に隣接する資料館に展示されている。



復元された祭り屋台

#### ●郷里に学校を建てる

そんな折、たまたま郷里に持ち上つた学校建設計画は代治郎にとって大きな朗報であった。アメリカ四年間の実績には自信があり、当時政府は西欧の模倣を大いに奨励していたから、洋風校舎の設計・施工は、代治郎にとっては故郷に錦を飾る大仕事だったと言える。



旧中込学校は、明治初期の旧態をとどめた貴重な洋風校舎の遺構として、1969(昭和44)年に国の重要文化財の指定を受けた。

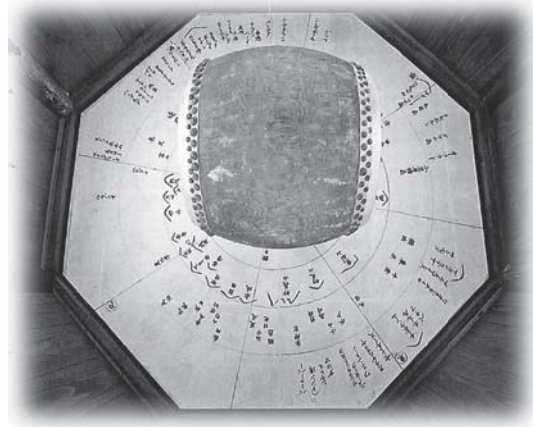
残された請負契約書(重要文化財)には、代治郎と世話役古間菊藏、小林清作、長坂富藏らが署名、異常に安い人件費「三四〇円」が記されている。

木材、瓦、麻縄、釘、来客の接待費、駄賃に至るまで千二百件にも上る支払い明細は明らかだが、その中になぜか代治郎への支払は見当たらない。

学校の建設は、一八七五(明治8)年に始まり、四月に地鎮祭、七月に上棟式を行い、松本の開智学校に先立って、同年十二月二五日には新校舎が落成し、仮校舎となっていた小林寺から移転、開校した。

アメリカに渡って広い世界、とりわけ欧米の建築技術を学んだ代治郎が建てた中込学校は、当時まだ珍しかったペンキ、鮮やかな色ガラスが使われ、和洋折衷の「ギヤマン学校」と呼ばれ、見学者が絶えなかった。また、佐久平を一望し、天を衝くような太鼓楼の天井には、こどもたちに世界を目を見開かせるかのよう

に、国内外の山々、東京やニューヨーク、ローマ、パリなど主な都市の名前が書かれた方位図が描かれていた。



太鼓楼の天井に描かれた方位図

この学校の建設費六〇九八円五二銭八厘のほとんどは、村内の寄付金で賄われたが、最低でも一戸一円という負担は、当時の小作農家などにとって決して軽いものではなかった。

しかし、「文明開化という教育を洋風校舎という新しい革袋に盛ることが必要」と、洋風校舎の建設を村民に提案し説得した用掛の小林豊次郎や、進んで資金を拠出した植松吉郎、小林藤九郎、関口宇兵衛ら資産家の存在なども村民が力をあわせる原動力となり、様々な困難を乗り越え、一年を経ずに校舎を完成させた。中込学校は、こうした村民の思いに共感した代治郎

の故郷への贈り物といったいいのではないだろうか。中込学校以外に、代治郎が建てたと分かる建築物は残されていない。

後に代治郎は名古屋に赴き、石鹼工場を起こしたが、濃尾地震で壊滅的な被害を受けてしまった。その後、和歌山県で花崗岩の加工、みかん酒の製造なども手懸けるが、大きな成果は得られないまま同県有田郡鳥屋城村(現有田川町)で七一歳の生涯を終えた。

### ●太鼓楼が人を育てた

いまでも青空高く聳え、先人達の思いを伝える太鼓楼は、村の指導者や教育者など多くの人材を育ててきた。

近くは、中央歴史学会で大きな役割を果たした教育者の市川雄一郎、その後輩で教育者・郷土史家として活躍した小林尚二、生涯を農村婦人の地位向上に献身した丸岡(旧姓・井出)秀子、その同級生で代治郎の曾孫にあたり、地域に短歌を広めた教師・竹内(旧姓・小林)すけじらがいる。

(小林濱治郎)

### 参考文献

- 佐久市志編纂委員会『佐久市志』佐久市志刊行会
- 長野県『長野県史』長野県史刊行会
- 小林尚二『中込学校創建略記』
- 『重要文化財・旧中込学校』佐久市教育委員会
- 『重要文化財旧中込学校々舎修理工事報告書』

## 佐久の先人たち④

### 五稜郭の築城、 日赤創設に尽した

おぎゅう ゆずる

大給 恒

(1839～1910年)



五稜郭といえば、全国ほとんどの人が函館と答えるが、それが信州にもある。佐久市田口の“もう一つの五稜郭（龍岡城）”は青年藩主松平乗謨（のち大給恒と改名）が、激動の幕末に築いたわが国最後の城である。

#### ●期待のエース登板

乗謨の松平家は「大給松平」といい、徳川家康の五代前に分家した家系である。三河に四千石、佐久に一万二千石を領した奥殿藩（現在の岡崎市）だが、主力地に藩庁を移したいというのは、立藩以来の宿願であったが、幕府が諸藩に課した参勤交代制によって、それができなかった。

乗謨は幼くして蘭学、フランス語などを学び、その学習から洋式築城学にも目を開き、14歳で奥殿藩主を継いだ。

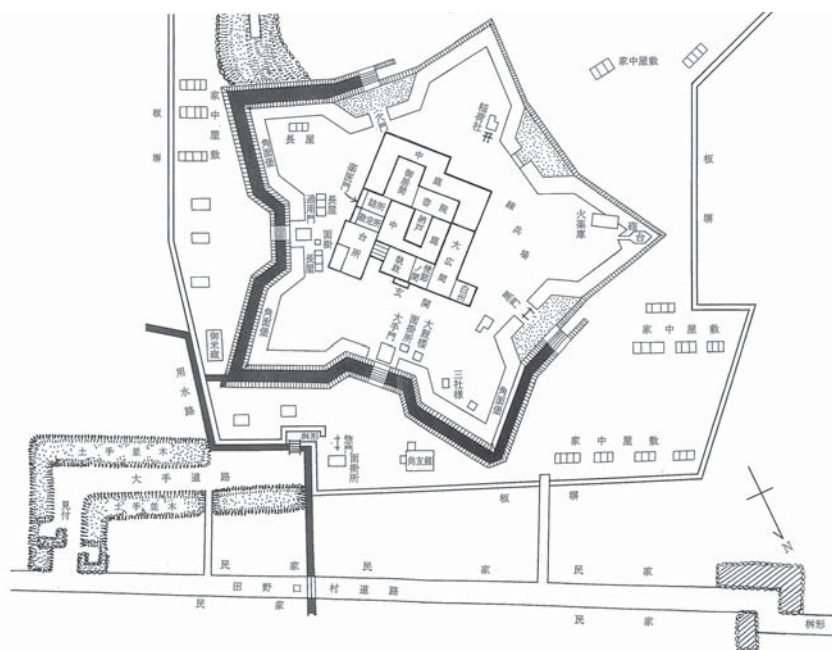
当時の幕府は、黒船の来航にはじまり、長州との戦いなど、内外の風雨にさらされていた。それに加えて、安政の大獄から桜田門外の変へ進むと、幕府の権威も地に落ちた。そのため、一八六二（文久2）年には参勤交代の制度も緩和された。これ wait っていた乗謨は、翌年には三河から信州へと国替え、田野口藩主となった。乗謨の素早い行動と、時局に対する開明に注目したのは幕府だった。討幕の嵐の中に立ち向かう期待のホープとして、彼はまず陸軍奉行に登用され、さらに若年寄から老中にも選ばれた。幕府の要職である老中は、譜代で五万石以上の大名から選ばれるのが通例だった。だが幕末で国家の危急存亡のとき、もうそんな規則にとられない時代となっていた。

#### ●もう一つの五稜郭

乗謨が五稜郭の築城に魅力を感じたのは、幕府が北辺警備のため、函館に五稜郭築城工事に取りかかった一八五七（安政4）年ごろとみられている。

彼が学習した洋式築城が函館に実現するとあって、この頃からフランスの北方、リース市に築かれた五稜郭をモデルに設計図を描き、国替えが実現したら、すぐに築城への工事に力を入れることにしていた。

五稜郭は五角形の突端に砲台を置くことによって、



築城当時の龍岡城五稜郭平面図

敵の攻撃を死角なしに防ぐことが出来る、とした当時最新の築城法。城は国替え3年後の一八六六（慶応2）年には完成、御殿も翌年には出来上がった。乗謨28歳のときで、藩名も龍岡藩に改めた。

一八六八（慶応4）年、戊辰戦争がはじまり、乗謨は老中を辞任したが、国内各藩の空気は一挙に佐幕から倒幕へと傾いた。龍岡藩にも官軍から出陣命令が出て、長岡攻撃の北越戦争に参加、6か月に及ぶ従軍となり、同年10月に凱旋した。毎年5月、臼田・小満祭



の龍岡藩ハレードはこの出兵から凱旋の模様を演じているものだ。

### ●諸藩に先がけて廃藩

明治維新の実現前後に乗機は、松平の姓を藩祖発祥の地大給（三河）にちなんで、「大給」に改め、さらに名も「恒」に変えた。

また、一八六九（明治2）年に龍岡藩の版籍を奉還し、さらに一歩進めて一八七二（明治4）年5月に廃藩を政府に申し出た。

直接の動機は龍岡城の築城による財政難にあったが、同時に新時代に即した国家体制の確立のためとしている。その建言書によると、「政権はようやく朝廷に戻ったが、軍事力はなお国内各藩にある。国家の体制を固めるうえにはまず軍事力の中央統一を図るため、各藩から統治権を返上させるべきだ」と訴えている。

これに力づけられた新政府は2か月後の7月、廃藩置県を断行、全封土を政府に返上させた。明治維新の大業も、これによってようやく完成した。

この建言によって大給は新政府に召しかかえられ、勲章制度の研究をまかされた。彼が登用されたのは、大給が幕府の陸軍総裁だった折に来日したフランス軍事顧問との交流を通じ、当時から外国の勲章制度に関心を持っていたためであった。



龍岡城五稜郭に現存する御台所と堀

### ●勲章制度と日本赤十字

大給は世界各国の勲章資料を集めて検討した。その結果、日本の勲章はあくまで日本古来の伝統をもとにしたものと、外国の勲章にない日本独特の作成に苦心した。そのため彼は自ら筆をとって全勲章の図案を描いた。

勲章制度の確立とともに、大給は賞勲局総裁にも選ばれたが、これとともに忘れることが出来ないのが日本赤十字社だ。

一八七七（明治10）年に西南戦争が起こり、多数の犠牲者が出た。徳川宗族長に選ばれた大給は、旧大名

たちと呼びかけてこの救済を計画した。同じ思いを持った元老院議員の同僚、佐野常民とともに博愛社を創設、その社則の第四条に「敵人の傷者といえども、救い得べき者は之を収むべし」と明記した。

これに対し、多くの人が反対したが、大給は「傷ついて苦しむものは敵も味方もない。わけへだてなく救済するのが博愛精神だ」と外国の事例を説明、納得させた。

戦いのあと、博愛社は日本赤十字社となり、福祉事業などに尽力している。勲章制度や赤十字活動など、その功績によって大給は子爵から伯爵に昇進、晩年は明治憲法で国家の大事に天皇の諮問にこたえる枢密顧問官にも選ばれた。

明治以後、大給家と地元臼田との交流は途絶えていたが、一九八二（昭和57）年、百年ぶりに関係を修復した。現当主の大給乗龍は曾祖父の大給恒の遺志を継いで日本赤十字社に勤務、現在は東京はじめ、各地の臼田出身者が集う関東臼田会の会長を務め、親睦を図っている。

（中村勝実）

.....

#### 参考文献

櫻元半重『大給亀庫公伝』『大給亀庫公伝』再版委員会  
中村勝実『もう一つの五稜郭』樂  
北野進『大給恒と赤十字』銀河書房

## 佐久の先人たち⑤

### 西洋式牧場をつくった

こう づ く に た ろ う

## 神津邦太郎

(1865～1930年)



明治の世に入ってヨーロッパから多くの食べ物が入ってきた。神津邦太郎は田や畑にならない山の斜面を利用して、牧草を育て乳牛を飼い、バターをつかって日本人の体力を向上させようと願った。

### ●日本の農業に牧畜を

神津邦太郎は一八六五（慶応元）年に志賀村（現佐久市志賀）の本郷に生まれた。神津家は佐久地方では指折りの財産家だったので、邦太郎は村の小学校である志仁学校を卒業すると、東京へ出て福沢諭吉の慶應義塾に入った。

在学中に英語や西洋から入ってきた新しい学問を身につけると、中国の上海に留学し、貿易の方法や西洋人の生活を学んだ。この頃から彼は稲づくりと蚕を中心とした日本の農業に牧畜を取り入れ、日本人々に

栄養のある牛乳やバターを食べさせたいと考えるようになった。

明治の世に変わると、政府や県庁では、新しい産業や文化に力を入れようとしていた。

邦太郎は一八八七（明治20）年五月、長野県庁の助けをえて、西洋から輸入された牝牛と牝牛三六頭を横浜で買入れ、志賀村の東に広がる原野に放牧した。

しかし多くの牛たちが食べる草が足りないの、県境を越えた群馬県西牧村（現下仁田町）の国有林を借りて、広い牧場を開くことを計画した。



昭和初期の神津牧場中央農区全景（神津牧場提供）

この土地は物見山（一三七五）の東斜面にある四八〇畝の原野で、木や草が生いしげっていた。邦太郎と仲間たちは、木を切り倒して牛舎をつくり、十二月には牛たちを移して、物見山神津牧場と名づけた。翌年からは千葉県の牧場やアメリカから、ジャージーなどの種牛四頭を買入れて牛を増やし、ゆるやかな畑には牛の餌となる牧草や麦を育てた。

### ●バターづくりをはじめ

一八八九（明治22）年の春には十一頭の子牛が生まれ、牛乳しぼりがはじまった。たくさんの牛乳は機械を使い、その頃は乳油と呼ばれていたバターに加工された。はじめはおいしいバターができなかったが、アメリカ人技術者の教えをつけ、遠心分離器を使うことにより、味の良いバターができるようになった。

明治初期の日本人は、牛乳を飲んだりバターを食べたりする人が少なかった。邦太郎はつくったバターを東京の食料品店や料理店に売りこんだ。この時恩師であつた福沢諭吉が「神津バター」を好んで食べ、まわりの人々や料理店にすすめてくれたことが大きな助けとなった。

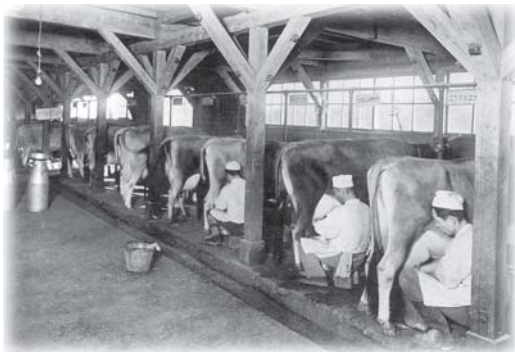
多くの牛を買入れ、畜舎をつくり、バターの機械を買入れるための二万五〇〇〇円は、父の国助が出してくれたので、牧場の収支は黒字をみるようになった。

邦太郎は日本の牧畜をさらに盛んにするために、たくさん乳の出る牛の改良が重要だと考えた。

## ●乳牛の改良

一九〇五（明治38）年邦太郎は農商務省の依頼を受け、弟とともにアメリカへ渡り、ジャージー牛など四五頭を買い入れた。牛は汽車や汽船を乗り継いで横浜まで運び、御代田駅から神津牧場までは歩いて運んできた。牛の代金や運賃に多くのお金を使ったので、牛市を毎年開いて、飼っていた牛一二〇頭を売った。これらの牛は長野県や群馬県ばかりでなく、日本の各地で飼われるようになり、邦太郎の願いが広がった。

邦太郎は新しいバター工場をつくり、アメリカから最新式の機械を導入したため、「外国のバターと比べても勝る」と試験官を驚かせた。勧業博覧会や共進会では、邦太郎のバターや牛が一等賞を受け、宮内省でも神津バターを買い上げた。政府は邦太郎の牧畜やバターの生産による功績に対して、緑綬褒章をおくった。



搾乳風景（神津牧場提供）

## ●苦しい牧場経営

神津牧場は、物見山の東斜面に広がる牧草地に牛が群れ、スイスのアルプスを想わせる美しい風景をつくり出した。一九一三（大正2）年には、牛の数が三一頭、生まれた子牛五七頭、売った牛四七頭、バター売り上げ一五五〇〇斤（一斤は一六〇g）と、日本でも指折りの牧場となり、「緑の草を牛に食べさせて、栄養の高い蛋白質をつくり、日本人の体を立派にしよう」という邦太郎の願いは達せられたかにみえた。



放牧風景（神津牧場提供）

しかし、バターの生産は年々のびだが、売上高はそれほど上がらなかった。それは外国の広い牧場でたくさんつくられるバターは、神津バターより安かったからであった。また神津牧場は山の斜面にあったので、草を刈ったり干したりするのは人手がかり、支払うお金のほうが、収入を上回るようになった。多い年に

は四〇〇〇円以上の赤字となり、佐久銀行からの借金は増えるばかりであった。

この様子を見ていた神津家の人々は「このまま牧場を続けると、家の財産を減らすことになる」と、牧場を続けることに反対した。邦太郎はそのことばに従って、やむなく牧場を売ることにした。

神津牧場は一九二一（大正10）年に銀行家の田中銀之助によつて三万円で購入取られ、佐久銀行からの借金を返した。働いていた人々は、新たな支配人のもとで邦太郎の意志をついで牧場を続けることになった。牧場の経営以外に邦太郎は、佐久銀行や長野農工銀行の重役のほか、志賀村の村長、北佐久郡議会議員として、人々のために力をつくし、一九三〇（昭和5）年に八四歳で亡くなった。その後、明治製菓（現明治乳業）を経て財団法人神津牧場の経営となった牧場の一角には、邦太郎の胸像が建てられ、牛たちや訪れる人々を今も見守っている。

（小林収）

### 参考文献

神津牧場百年史編纂委員会『神津牧場百年史』神津牧場  
小林収「神津邦太郎による神津牧場の開設」『千曲』

東信史学会

肖像写真提供

神津牧場



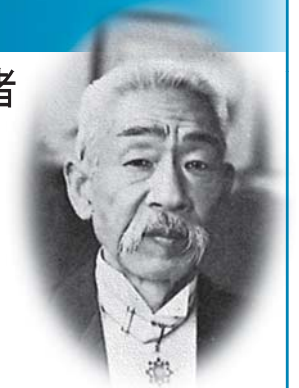
## 佐久の先人たち⑥

### 信州教育の充実に尽した教育者

さとうとらたろう

## 佐藤寅太郎

(1866～1943年)



信濃教育会会長を15年つとめ信濃教育会の基礎を築くとともに、長野県立工業学校（現長野工業高校）の設立、松本高等学校（現信州大学）の誘致、長野県立図書館の設置、信濃教育会館の建設など、信州教育の充実に尽した教育者。

### ●腕白少年

寅太郎は、勉強よりも遊びの方が大好きな腕白少年で、母親のせいに連れられて長野県に登校した。せいは、菓子や絵本を褒美として与え、小学校へ行きたがらない寅太郎の登校を奨励したという。

しかし、小学校の成績は優秀で、一八七八（明治11）年、明治天皇が東北信を通過した時は、生徒隊長として追分原で天皇を迎えた。翌年、学校を巡視した長野県知事がシベリア地図で川の名を質問した時は、オビ川・レナ川など名前をすらすらと答えた。

一方で、水泳中におぼれ、溺死寸前に救助されたと  
いう逸話もある。



長土呂の生家（信濃教育会所蔵）

### ●行動派の校長

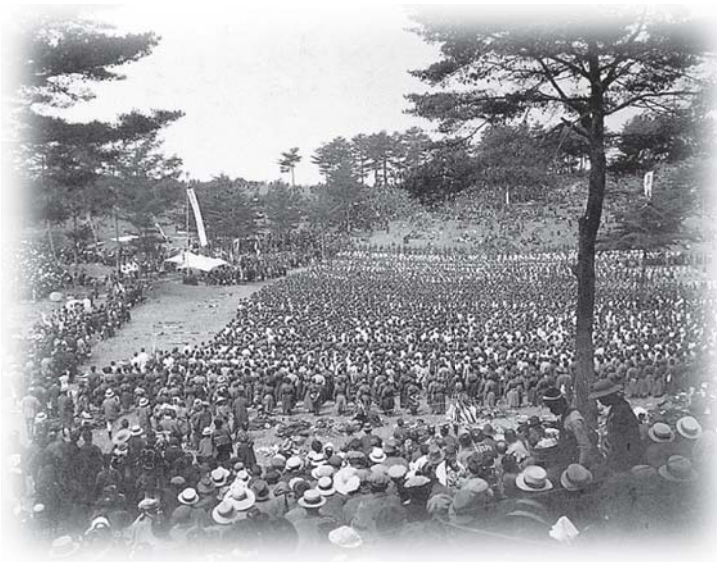
一八八九（明治22）年、長野県尋常師範学校（現信州大学教育学部）を優秀な成績で卒業後、川西・岩村田・小諸などの各小学校長をつとめた。

本牧村など六つの村で設立した川西高等小学校では、兎狩り・雪合戦・陣取など野外運動を奨励し、一八九三（明治26）年に実施した群馬県への修学旅行は、北信地方で最初の宿泊旅行とされる。

岩村田尋常高等小学校では、義務教育である尋常小学校四年を終え、工業・農業・商業などの実業に従事する者に必要な教育を行うために、尋常小学校を卒業した一二歳以上の者を入学資格として修学年限を三年

とする乙種実業学校の設立を主張した。

小諸尋常高等小学校では、全校生徒を率いて浅間登山を成功させた。また、日露戦争の日本海海戦の勝利を祝し、北佐久郡の全校を集めて御牧原で行った連合大運動会では総指揮官をつとめ、東郷平八郎元帥から祝電を受けるなど、行動派の校長であった。



御牧ヶ原大運動会の整列風景（明治39年 土屋啓二氏所蔵）

### ●信濃教育会北佐久部会長

一八八六（明治19）年、長野県下の教員を集めた教育団体である信濃教育会が発足すると、翌年北佐久教育会は最初にその支会（一八九〇年に信濃教育会北佐久部会と改称）となった。

信濃教育会と同様に北佐久部会の役員も、会長に北佐久郡長が就任し、そのもとで郡の役人が会務や会計をとりしきるのが通例であった。やがてそれにあきたらず、会長に教員の代表が就任し、教育会を教員が主体となった教育組織に変えていく動きが始まった。この教育会の自主化運動の先陣を切ったのが、北佐久部会である。

一九〇六（明治39）年、小諸尋常高等小学校長の寅太郎は、選挙により県下で初めて教員として北佐久部会長に就任した。教育会の自主化運動は、その後県下に広まり、各部会で教員の部会長が誕生した。

北佐久部会長に就任後は、部会の財政面の強化や郡内教員の全員入会による会員数の拡張など、指導力を多いに発揮した。

### ●信州教育の充実に尽す

寅太郎は、信濃教育会の副会長を三期つとめた後、一九一八（大正7）年に、信濃教育会長に就任した。以後、一九三三（昭和8）年に起きた二・四事件（「教員赤化事件」）の責任をとり辞任する一九三四（昭和9）年三月まで、信濃教育会長を八期一五年つとめ、信濃教育会の基礎を築いた。

会長の在任中、長野県師範学校を統合して男子・女子各一校制するとともに、県下で初めての工業学校である長野工業学校を設立した。

また、中学校の上に接続する男子の高等普通教育の学校である高等学校の誘致運動が全国で起きると、高等学校を松本に誘致する運動の先頭に立ち、全国で九番目の高等学校である松本高等学校の誘致を実現させた。

さらに、岩村田実科女学校や岩村田中学校（現岩村田高校）の創立、長野県立図書館の設置、信濃教育会館の建設、教員互助会の設立にも貢献した。



旧制岩村田中学校（『岩校六十年誌』より）

一方で、信

州教育の海外発展を知事に献策、ブラジルや満州などの海外移民を奨励し、信濃海外協会が設立されると副総裁に就任した。こうした信濃教育会の海外発展の方針は、のちの

満蒙開拓青少年義勇軍や「興亜教育」につながることになる。

### ●衆議院議員として

一九二〇（大正9）年、寅太郎は、北佐久政友会の推薦をうけ衆議院議員に当選し、衆議院議員を一期つとめた。議員在任中は、満州大学設立の建議を衆議院に提出し、満鉄医学大学、旅順工科大学を実現させた。こうした永年の功績により、長野市の信濃教育会館前庭に頌徳碑、岩村田中学校中庭に寿像が建てられた。信州教育の充実や地域の発展に尽した寅太郎の生涯は、多くの者から慕われ、一九四三（昭和18）年九月に、岩村田中学校で行われた学校葬には、大勢の人が参列したという。

（伊藤純郎）



岩村田中学校に建立された寿像  
この像は戦争中に供出されてしまい、  
現在岩村田高校内に立つ像は平成2年  
に再建されたものである。  
（昭和17年度岩村田中学校卒業アルバムより）

### 参考文献

『信濃教育』第五四九号（佐藤会長頌徳記念号） 信濃教育会  
市川本太郎『長野師範人物誌』 信濃教育会出版部  
肖像写真  
信濃教育会所蔵



## 佐久の先人たち⑦

### 佐久鉄道をつくった

お お い と み た

# 大井 富太

(1868～1928年)



明治になって佐久へ信越線が入ってきたが、北の浅間山のふもとを通っていた。南佐久の人々は大井富太を中心に、みんなの力を合わせて、小諸から小海まで蒸気機関車を走らせ、人々に便利を与え、産業を発展させた。

#### ●議員となって働く

大井富太は一八六八（明治元）年平賀村（現佐久市平賀）で生まれた。長い武士の世が終って新しい時代が始まった年であった。平賀学校を卒業した富太は、新しい学問を志し、師範学校の予科と東京の明治法律学校（現明治大学）で勉強した。しかし、父が病気で亡くなったので、平賀の実家へもどって、農業のかたわら、蚕種つくりにはげんだ。

富太は一八九五（明治28）年村人たちにおされて、平賀村の村会議員に当選し、二年後には南佐久郡会議

員になって、道路や学校を新しくするために力をつくした。富太の意見や人柄は、人々の信頼を得て、三三歳の若さで長野県会議員に当選し、一九一九（大正8）年までに五回当選した。明治四四年からは県会議長となつて、長野県の師範学校や工業試験場を新しくし、千曲川の堤防工事を決めるなど、県政でも活躍した。

#### ●製糸場を大きくする

富太は佐久の人々の暮らしを良くするために、養蚕と製糸を盛んにすることが大切だと考えた。平賀村には一八九〇（明治23）年から水車を廻して繭から生糸をとっていた山岡製糸場があった。富太は一九〇三（明治36）年から資金を出して山岡製糸の重役となり、収益を上げ、釜数を増やして工場を大きくした。

一九〇六（明治39）年には社名を佐久製糸合資会社と変え、富太が社長となった。この会社は一四〇釜の製糸場のほか、揚返場や繭庫をもっていた。



佐久鉄道案内（大正12年 香川県立ミュージアム蔵）

また、野沢・臼田・大沢などにも製糸場をつくり、糸とりの技術を習う工場も建てた。製糸場でとられた細くて白い生糸は、揚返場で大きなわくに移して荷造りされ、絹織物の工場に送られたり、横浜から外国へ輸出されていた。中込・野沢・臼田では、若い女工さんや繭や生糸を売り買いする人たちにぎわった。

県会議員であった富太は、長野へ行く時に、平賀の家から小諸まで砂や石の道を人力車で行った。小諸で鉄道に乗ると、レールの上をすべるように走る汽車に、文明のすばらしさを感じていた。

「南佐久にも鉄道がほしい」という願いは富太ばかりでなく、地域の人々の夢となった。その頃の日本では、各地に私鉄をつくらうとする動きがあり、明治末には、東信軽便鉄道線の計画が持ち上がっていた。



## ●佐久鉄道をつくる

一九一四（大正三）年五月、富太が社長となって佐久鉄道株式会社がつくられた。木内吾市（大沢）、黒沢睦之助（穂積）、阿部四之助（岩村田）らが役員となって計画をたてた。佐久の七八五人が五〇〇〇株を買って、二五万円の資本金が集まった。中込や岩村田では駅の用地を寄付し、各村役場や南・北佐久郡会も補助金を出して佐久鉄道の建設を助けた。

工事は小諸駅からはじまり、三岡―岩村田―中込へと、レールを敷き鉄橋をかけて、起工式から八ヶ月余で完成させるスピードぶりであった。

一九一五（大正四）年八月八日、長い煙突のC型蒸気機関車に引かれた祝賀列車は、見物に集った大勢の人々の待つ中込駅に着いた。駅前には佐久鉄道の本社旅館や店などが建ち、汽車に乗る人々にぎわった。

中込から小諸までは一九銭（特等は二九銭）であったが、ものめずらしさもあつて乗る人が多く、一

年で二万円の黒字となった。勢いをえた佐久鉄道

は、中込から羽黒下まで

を、その年の十二月に開通させた。羽黒下から南

へは、馬流で大きな石を



中込駅前にあった佐久鉄道本社

取りのぞき、千曲川にそったかたい岩をけずって、一九一九（大正八）年に小海まで開通させた。

## ●鉄道によって佐久が変わる

佐久鉄道の開通によって、多くの繭や生糸のほか、米や酒、材木や石、生きた鯉なども送り出された。鉄道は、馬車や荷車より早く大量に人や荷物を運べたので、産業が発展した。

これまで汽車に乗るには、歩きか馬車で御代田駅まで行かなければならなかったが、小諸で乗り換えて、東京や長野へ楽に行けるようになり、駅のまわりには新しい街ができて、

村や町の形が変わった。

中込村は駅前の新

しい道路に沿って商

店が建ち並び、人口

が増えたので一九一

九（大正八）年に中

込町となった。鉄道

が千曲川の東を通っ

たことから、三反田

（白田）・羽黒下・

土村（小海）にも駅

前集落が生まれ、そ

れまでの佐久甲州街



佐久鉄道で使われていた機関車



法被姿が正装だった保線従業員

道にそった集落と、千曲川をはさんで対に並んだ街ができ、日本では珍しい「双子集落」が生まれた。

## ●今も走り続ける小海線

富太や重役たちは、佐久鉄道を小海から南へのばして、中央線の小淵沢へ結ぶとする計画をもっていた。しかし、小海から南は千曲川の谷が険しく、野辺山高原へのぼる坂は急で、鉄道をつくる技術や資金が足りなかった。

一九二〇（大正九）年に繭や米の値が下がる経済不況となり、鉄道の収入が減った。佐久鉄道ではガソリンカーを走らせたり、社長や重役たちの給料を減らすなどの努力を続けたが、経営は苦しくなるばかりであった。そんな時、一九二八（昭和三）年に、富太は病のため八〇歳で亡くなった。

佐久鉄道は、一九三四（昭和九）年国に買収され、小海線となって今も佐久高原を走り続けている。

（小林収）

## 参考文献

木内政太郎『佐久名流評林』佐久名流評林著作部

平賀村誌刊行委員会編集部『平賀村誌』

平賀村誌刊行委員会

佐久市志編纂委員会『佐久市志』佐久市志刊行会

『長野県蚕糸業統計』

肖像写真提供

長野県議会事務局

## 佐久の先人たち⑧

ふるさとを想い、  
志賀高原と命名した実業家

こう づ と う へ い  
**神津 藤 平**

(1871~1960年)



神津藤平は若い頃から薬用人参・牛馬の改良・発電・銀行と佐久の産業を発展させた。彼はさらに夢を広げ、河東鉄道、長野電鉄そして志賀高原の観光開発へと、事業ひと筋に88年の生涯を生きぬいた信念の先覚者である。

### ●多くの事業に挑む

神津藤平は一八七一年（明治4）年に志賀村（現佐久市志賀）の神津清三郎の次男として生まれた。村の志賀仁学校と岩村田学校（郡立北佐久高等小学校）を卒業すると、一九歳の時に東京三田の慶應義塾へ入学した。塾長の福沢諭吉からは、人間としての生き方や経済について学び、小林一三、藤原銀次郎など多くの友だちと交って、新しい産業に眼をひらいた。

義塾を卒業すると、東京電灯に入社したが、二三歳の時に両親の死と、兄の病気のためにふるさとに帰り

妹や弟のめんどろをみながら、家業の薬用人参栽培に精を出した。

村に帰った藤平は、人々におかれて、村会議員・村長・県会議員となった。その間に「北佐久産牛馬組合長」となって、牛馬の改良につとめ、長野種馬所の誘致にも力をつくした。

一九〇〇（明治33）年、藤平は一族の四人と資金（二五〇〇円）を出し合って、神津合名会社をつくって銀行をはじめた。その頃は日清戦争が終わって、製糸場や商店を大きくするための資金を必要とする人が多かったので事業は順調であった。そこで一九〇七（明治40）年には神津猛らも加わって、資本金を一〇万円に増やすとともに、猛の志賀銀行や野沢貯蓄銀行などの重役をかねて、佐久地方の産業を支えた。

藤平の祖父孝太郎は、佐久で薬用人参を初めて栽培した人であった。一八四四（弘化元）年から日光や会津の種を買いいれてまき、山を切り開いた新しい畑に、小屋がけするなどの方法で栽培に成功した。薬用人参は高い値段で売れたので、明治のはじめには志賀村や田口村をはじめ、佐久の村々で栽培する人が増え、小県郡へも広がった。

一九一一（明治44）年に、信州人参同業組合ができると、藤平は組合長となった。栽培方法の研究を重ね、形や大きさを揃えて出荷した人参は、東信地方の特産

物となり、農家の収入を増加させた。

藤平は産業をさかんにするためには、電気の利用や鉄道を敷くことが大切だと考えた。

一九一二（大正元）年に長野電灯の取締役となつて、松原湖の水を利用して八那池発電所をつくり、佐久地方の家々に初めて電灯をともした。藤平は一九一七（大正6）年には東信電気（鈴木三郎助社長）の重役となって、千曲川にいくつかの発電所をつくって、東京へ電気を送った。

### ●河東鉄道から長野電鉄へ

一九一四（大正3）年に佐久鉄道が生まれると、藤平は相談役となって、鉄道の敷設にも力をつくした。佐久鉄道は一九一九（大正8）年に小諸から小海まで開通させると、さらに北と南へのばして、日本海と太平洋を結ぼう

と考えていた。

藤平は、佐久鉄道が持っていた越線の屋代駅から須坂駅までの免許権をゆずり

受け、北信で鉄道建設にの



河東線市川鉄橋を渡る蒸気機関車  
『長野電鉄80年のあゆみ』（長野電鉄刊）より

り出した。

佐久鉄道での経験を生かして、屋代から千曲川に沿って須坂まで、約二四<sup>き</sup>の鉄道を敷くと、一九二二（大正11）年には蒸気機関車で運転をはじめた。この鉄道は須坂や屋代の人々に「河東鉄道」と呼ばれて親しまれた。

鉄道は須坂から中野へ、さらに木島平へと延ばされたが、人口の多い長野市と結ぶことが藤平の願いであった。そのためには千曲川に長い鉄橋をかけなければならないので、多くの資金が必要だった。そこで鉄道と道路が並行して通る村山鉄橋を、共同でかける願いを県庁に出して補助金を受けて一九二六（大正15）年に完成させた。

この年藤平は長野電鉄㈱をつくり、須坂と長野市内を結ぶ鉄道を合併して、次第に電車に切りかえた。一九二七（昭和2）年には、中野と湯田中<sup>ゆだなか</sup>まで開通させ、北信地方の大きな町や温泉地を結ぶ重要な鉄道となった。

### ●志賀高原の命名者

藤平は一九一四（大正3）年に友人の福沢桃介<sup>もくけい</sup>と、発電用の水をさがしに、北信の琵琶池を訪れたことがあり、周辺の山々や温泉のすばらしさを知っていた。そして、長野電鉄の乗客を増やすためには、



長野電鉄沿線・温泉名勝鳥瞰図 1935（昭和10）年（国際日本文化研究センター所蔵）  
この頃から「志賀高原」の名称を使っている。

温泉や高原に客を呼ぶことが大切だと考えるようになった。一九二一（大正10）年に大阪の阪急電鉄を大成した小林一三が、病気をなおすために湯田中温泉の湯本館<sup>もとく</sup>に泊っていた。慶應義塾時代の旧友だった二人は、高原を歩きながら新しい観光と交通について語り合った。

藤平は湯田中温泉や上林温泉<sup>かみりん</sup>に、遊園地やプールの付いたホテルをつくった。さらに平穩村<sup>ひいでい</sup>（現山ノ内町）の和合会<sup>わがわい</sup>が持っていた土地二〇〇万平方<sup>へい</sup>メートルを二〇年間

無償<sup>むじやう</sup>で借りて、観光地づくりをはじめた。

一九二九（昭和4）年にノルウェーのヘルゼットを招いてスキー場をつくり、秩父宮<sup>ちちののみや</sup>が岩菅山<sup>いわかみ</sup>に登山したことなどの宣伝につとめた。さらに上林から高原へ向かって新しい道を開き、丸池までバスを走らせたので、高原を訪れる人が増えた。藤平は生まれた村にちなみ、一帯の山や池を含めて「志賀高原」と名づけた。

一九六〇（昭和35）年十月十一日、銀行・発電・電気鉄道・観光地づくりと、日本の産業の発展につくした藤平は病のために帰らない人となった。

長野電鉄では、藤平の徳をいつまでもたたえるために、上林ホテルに胸像をたてた。

（小林 収）

### 参考文献

長野電鉄㈱総務部『長野電鉄80年のあゆみ』長野電鉄  
木内政太郎『佐久名流評林』佐久名流評林著作部  
信濃毎日新聞社開発局出版部『長野県百科事典』

信濃毎日新聞社

北佐久郡志編纂会『北佐久郡志』国書刊行会

### 肖像写真

『長野電鉄80年のあゆみ』（長野電鉄刊）より



## 佐久の先人たち⑨

### 現代書道の基礎を築いた書家

ひだいてんらい  
**比田井天来**

(1872～1939年)



書の研究を深めた天来は、中国古典の用筆法ようひつを発見して書道界に大きな影響をもたらし、ここから現代書道の新しい潮流が生まれた。書家として初めて芸術院会員となった天来、また故郷をこよなく愛した人であった。

#### ●貞祥寺住職のすゝめ

比田井天来は一八七二（明治5）年、北佐久郡協和村片倉（現佐久市協和）に、比田井清右衛門、コトの三男として生まれた。生家は江戸期から名主を長くつとめ、天来の幼少期には製糸業を営んでおり、近年まで醤油の醸造を家業としていた。

天来は幼名を常太郎といい、一八八七（明治20）年協和小学校温習科を卒業し、五郎兵衛新田村（現佐久市甲）出身の漢学者依田稼堂かどうが野沢町（現佐久市野沢）に開いていた有鄰塾ゆうりんという学校で漢学を学んだ。



天来は晩年、さまざまな用筆法で自在に書き、最後まで新しい書求めていた。

『現代書道の父 比田井天来』（天来書院刊）より

天来は元子に小琴という雅号を贈り、天来のもとで勉強を重ねた小琴は、のちに「かな書道」の大家となった。

一八九七（明治30）年、前山村（現佐久市前山）にある貞祥寺ていしょうじを訪れた時、住職の薦めで「知足軒」という文字を書いたところ、住職に「君は書家になれる。東京へ修行に出なさい」と言われ、これがきっかけで上京し、小石川哲学館で哲学と漢学を修め、書を日下部鳴鶴なべうりかくに学んだ。鳴鶴は自分が書いた手本を学ばせるのではなく、広く古典から直接習うよう指導したが、この学び方は天来が生涯用いた学習法になった。一九〇〇（明治33）年、二九歳で常太郎を鴻と改名し、翌年鎌倉円覚寺で禅を修めた。天来という号もこのころから使い始めている。天来が父と上京した時泊まっていたのは日本橋蛸殻町にあつた小さな旅館で、天来はこの宿の一人娘元子と結婚した。

#### ●古典的用筆法を発見

一九一五（大正4）年、東京高等師範学校（現筑波大学）の習字科講師嘱託となり、文部省検定委員を委嘱された。天来は、文部省の検定に古典臨書と鑑識を初めて取り入れた。

明治以降書壇では、やわらかい羊毛筆を垂直に立てて書く「迴腕法」という技法が流行していた。師であった日下部鳴鶴もこの技法であった。しかし、最も美しい楷書かいしよが書かれたといわれる中国唐代の線は、この迴腕法では書けないのではないかと考え、天来は新しい筆法の研究を始めた。

一九一六（大正5）年から二年余り、天来は家族と別居して、鎌倉建長寺に住んで古典の研究に没頭し、新しい用筆法を発見した。剛毛筆こうもうひつを使い、筆を斜めに



63歳頃の作品。  
中国の古典に習って天来が作り出した「木簡隸」という書体。  
『現代書道の父 比田井天来』（天来書院刊）より

鳥驚林下夢  
風展枕前書  
掃石雲隨帚  
耕山鳥傍人

構える筆法で、天来はこれを「俯仰法」と名付け、古典はこの用筆法で書かれたと考えて「古法」とも呼んだ。この発見が書道界に大きな影響を及ぼし、これが近代書芸術の基礎となり、戦後から現代までのさまざまな潮流を生み出したのである。天来が現代書道の父と呼ばれる理由の一つがここにある。

### ●育ててくれた故郷に恩返し

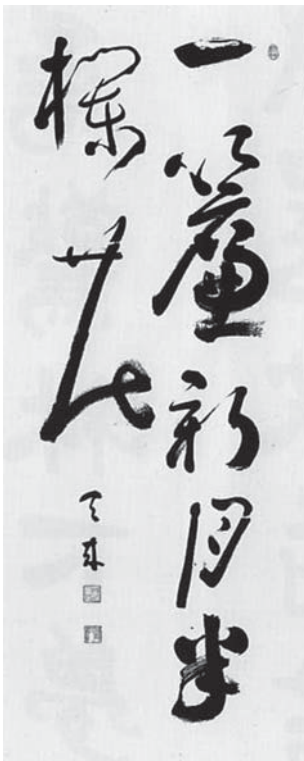
佐久地方の愛好家たち百余人が集まり、天来の書を順番に購入して財政的にも支援しようと、屏風百双会を作っていた。一九一七（大正6）年、郷里の母校協和小学校が火災に遭い、天来はこの百双会の揮毫料のうち千円を校舎再建の費用として寄付した。

一九一九（大正8）年、書研究と書道研修の場として「書学院」の建設を思い立ち、「書学院建設趣旨書」を発表、この賛同署名には犬養毅、松方正義、嘉納治五郎など、当時の著名な人たちが名を連ねた。

### ●「学書筌蹄」刊行と書学院の建設

一九二二（大正10）年、古典の臨書集「学書筌蹄」全二〇巻（うち三巻は小琴の「かな」）を刊行。天来が発見した用筆法を用いての臨書で、大きな反響を呼んだ。一九二六（大正15）年、天来は台湾・朝鮮を訪れたが、朝鮮には優れた作品が多々あることに驚き、李王家の宝蔵まで調査して、一九三一（昭和6）年「朝鮮書道菁華」全五巻を発刊した。

一九三〇（昭和5）年、東京渋谷区代々木に「書学院」が完成した。ここには若き書家たちが集い、上田桑鳩・桑原翠邦・金子鷗亭・手島右卿ら、戦後の書道界を背負う人たちが育った。一九三二（昭和7）年、東京美術学校（現東京芸術大学）師範科・習字科の講師となる。一九三六（昭和11）年、鎌倉にも書学院を完成させたが、この工事は大工をはじめほとんどの職人を郷里協和村から呼び、郷里とのつながりをさらに深めた。



一簾新月半欄花（すだれ越しには月が見え、手すりの下には花がある）この書を刻石した碑が天来自然公園に建っている。 比田井昭三氏所蔵

一九三七（昭和12）年、「大日本書道院」を創立して、総務長になった。この年に制定された帝国芸術院会員に書家として推挙された。晩年は漢字整理事業に情熱を注いだ。これは未完に終わった。一九三九（昭和14）年一月逝去。郷土に支えられ、また郷土を支えた書家であ



佐久市立天来記念館外観



天来生家の裏山に造られた天来自然公園

り、書研究者であつた。

地元や門流の人たちの尽力で、一九七五（昭和50）年に天来記念館（現佐久市立）が建てられ、また二〇〇六（平成18）年、天来生家の裏山に天来自然公園（NPO法人未来工房もちづき経営）が造られ、今も多くの人々が訪れている。

（吉川徹）

#### 参考文献

- 『近代書道開拓者 比田井天来・小琴』 比田井天来・小琴刊行会
- 比田井天来『書の伝統と創造 天来翁書話抄』雄山閣出版
- 「生誕一三〇年現代書道の父比田井天来」『墨』一五九号特別企画 芸術出版社
- 比田井和子『現代書道の父 比田井天来』天来書院
- 肖像写真
- 『現代書道の父 比田井天来』（天来書院刊）より

## 佐久の先人たち⑩

### 早慶戦第一戦の勝利投手

さくら い や いち ろう

## 桜井 弥一郎

(1883~1958年)



日本の野球は、王・長嶋の登場でプロ野球の黄金時代を迎えたが、それまでは学生野球が人気の的で、その開幕を飾る早慶戦第1戦は慶應に凱歌、桜井弥一郎は歴史に残る勝利投手に輝いた。

### ●石合戦で鍛えた投手力

桜井は佐久市桜井の出身。町村合併以前は桜井村といわれたこの村は、面積二平方キロと佐久地方では最も小さい村で、その割には人口が多かった。耕地が狭いので昔から境界争いが盛んで、千曲川をはさんだ対岸とは、よく水争いを起こした。それに刺激されて、子どもたちも時には石合戦へと発展した。

桜井も少年時代、何回かその石合戦に加わった。その思い出が忘れられないためか、彼は慶應の学生時代『運動の友』という当時のスポーツ雑誌に次のように

投稿している。

「…年もからだも小さいながら、ずいぶん敵を悩ますものがあつた。それは僕だった。僕は石なげが得意だった。そのため、僕は小さい時に頂戴したお目玉の多くは石投げだった」。

桜井は野沢小学校から旧制上田中学（現上田高校）に進んだ。当時はまだ佐久には旧制中学はなかったのだ、やむなく上田に下宿しての進学。彼は早速、野球部へ入った。

わが国に野球が伝えられたのは、それより20余年前の一八七二（明治5）年。当時はアメリカ直輸入そのままに「ベースボール」と呼ばれていた。それが後に「野球」と訳され、上田で始められるようになったのは、彼が上田中学へ入学した頃だった。当時の野球部は宮原清（のちに初代日本社会人野球協会会長）、鷲沢与四二（のちに衆院議員）などが中心で、県内では最強を誇っていた。

彼ははじめは捕手だった。マスクもミットもなく、素手でファンバウンド・キャッチ。その後、遊撃手となるが、その守備範囲は広く、華麗なる彼のプレーは、野球熱が高まることにファンの喝采を浴びた。

### ●夢の早慶第一戦

上田中学を卒業した桜井は、はじめ一高（旧制第一高校）をめざした。当時の一高は、“天下の秀才”ばか

りでなく、野球も全盛時代で、早稲田も慶應も一高には歯がたたなかつた。一足先に慶應に入っていた宮原は、彼に慶應入りをすすめ、「強い一高に入るのもよいが、その一高を倒すのも男子の本懐ではないか…」その一言に桜井も一高をあきらめ、慶應への道を選んだ。



慶應のユニフォーム姿の桜井

こうして慶應に入った桜井は「打倒一高」をめざして猛練習。1年後には投手として初挑戦した。結果は13対10。敗れたとはいえ、無敵一高に肉薄する善戦ぶりだった。

この結果に早稲田がわいた。一高にかわって「早慶時代も夢でない」と、その前哨戦として早慶戦の開催を呼びかけた。勿論、慶應も大賛成。「打倒一高」に燃える早慶戦はこうして開かれることになった。



一九〇三（明治36）年11月21日、歴史に残る第1回早慶戦は、東京・三田の慶應グラウンドで開かれた。一高という強敵をおいての試合とはいえ、ともに私学の雄の対決。東京を二分する観衆三千が、かたずをのむ中で世紀の一戦となった。

当時両チームとも、ユニフォームだけは一応揃っていたが、それ以外はほとんどなかった。スパイクはな



第1回早慶戦のメンバー（後列右から3番目が桜井）  
（慶應義塾福澤研究センター所蔵）

くて足袋はだし、ストッキングもなくスネを出しての戦いぶり。投手は慶應が桜井、早稲田は河野安通志。

試合は両者の打線が爆発して7回まで8対7という接戦で、早稲田がリードしていた。8回表、慶應の3番打者の宮原がいきなり右中間を破って2者をかえして逆転、さらにヒットを重ねてこの回4点をあげ、11対9で慶應に凱歌があがった。

### ●学生野球は早慶時代に

この試合をみた一高は早速、早慶両校に試合を申し入れた。まず第一戦は早稲田が対戦したが、前年までの一高の勢いはさっぱりみられない。結果は9対6で早稲田が勝利した。

ショックを受けた一高は、陣営を建て直し、慶應との第2戦に臨んだ。試合は9回表では一高が1点リードしていたが、その裏、桜井の大三塁打で2点をあげ、11対10で慶應が勝った。この一戦で学生野球は完全に一高時代から早慶時代にかわり、野球人としての桜井の地位も決定的となった。

桜井は慶應卒業後、一時は銀行に勤めたが、野球への思いは捨てがたく、慶應OBでつくった三田クラブで活躍、その後監督となってアメリカなどへ遠征、さらに、同クラブ会長として後輩の指導に当たった。

戦後は一時、郷里の旧桜井村に疎開していたが、晩年は娘のつぎ先の伊豆大島で暮らし、70歳すぎまで

野球のコーチをしていた。

一九六〇（昭和35）年、桜井は日本野球の発展功労者として、野球殿堂入りした。野球殿堂は野球体育博物館（東京都文京区後楽）にあつて、野球発展に大きな貢献をした人を讃えるため、現在（二〇一二年）まで百七十七人が殿堂入りしている。

殿堂には「慶應義塾大学の投手兼強打者として初期早慶試合にチームの中心となり三田クラブを率いて野球界の元老として敬愛された」とする顕彰文と彼のレリーフが掲額されている。長野県出身では桜井がはじめての殿堂入りであった。

（中村勝実）



野球殿堂に掲額されている桜井のレリーフ  
（財団法人野球体育博物館所蔵）

### 参考文献

中村勝実『近代佐久を開いた人たち』櫛

.....

## 佐久の先人たち⑪

### アメリカで活躍した彫刻家

かわ むら ご ぞう

## 川村 吾蔵

(1884~1950年)



アメリカで彫刻を学んだ川村吾蔵は、酪農家の依頼で「完全なる乳牛模型」を制作し、牛のGOZOと名を高めた。彼は野口英世、マッカーサーなど名高い人々の胸像を造ったが、それは深い人間性を表現するものであった。

### ● 芸術家を目指し渡米

彫刻家川村吾蔵は一八八四（明治17）年南佐久郡田村（現佐久市田田）上宿に川村豹治（後に兵次郎と改名）・せむの三男として生まれた。一八九七（明治30）年に田田尋常小学校（現田田小学校）を卒業し、長野県尋常中学校上田支校（現上田高校）に入学、学校近くの寺に下宿して通学した。

この中学在学中に母方の従姉妹が小県郡津村（現東御市）の丸山健作（晚霞）と結婚し、晚霞と吾蔵との交流が始まった。晚霞は既に明治美術会会員であり、

内国勧業博覧会に油絵が入選したり、明治美術会展に水彩画を出品したりしていた。また、アメリカ・ヨーロッパを旅して絵画展を開催し、帰国後は太平洋画会に参加、小諸義塾の図画教師となった。

吾蔵は中学卒業後、切原尋常小学校（現切原小学校）の代用教員を数か月勤めた後、遠縁にあたる横浜の貿易商の山本商店へ就職した。ここに、ロンドン・ウィーンに留学しピアニストになり、東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）の教師となった山本清子がいいて、吾蔵に海外の話聞かせた。

その後吾蔵は芸術家を目指して渡航するのであるが、晚霞と清子の影響が大きかったといわれる。

吾蔵が中学を卒業の年に父母が相次いで亡くなった。翌一九〇四（明治37）年、父母の一周忌を済ませ、兄増太郎の許しを得て、親戚の人々にも見送られ、横浜港からアメリカに向けて旅立った。そして北東部の都市ボストンに着いた吾蔵は、諏訪出身で晚霞の知人、古美術商をしていた松本文恭の店の手伝いをしながら生活を始めた。

### ● ニューヨークのアカデミーへ

吾蔵はまず、ボストンのハイスクールで英語を学び、次の年の一九〇五（明治38）年にはデッサン・スクーールへ入学した。この学校の教授に彫刻家のキットソンがいいて、吾蔵はこの教授の助手となった。

これが彫刻家への道の第一歩であった。翌一九〇六（明治39）年にはニューヨークのナショナル・アカデミー・オブ・デザインの彫刻科へ入学し、ペイン（女史）教授の助手となった。

ここで吾蔵は、立体拡大機（エンラージング・マシン）を改良して完成させ、特許を取った。これがその後の吾蔵の彫刻家としての活動に大きな力となった。この学校では、二年連続で彫刻コンクールの一等賞をとった。



エコール・デ・ボザール在学中の吾蔵

一九一〇（明治43）年、吾蔵はペイン教授の紹介でフランス在住のアメリカ人彫刻家マクモリスを紹介されフランスへ渡った。マクモリスはアカデミック（学究的）な作風の彫刻家で、アメリカから多くの公共彫刻を依頼されており、ここフランスでは原型の制作を行っていた。吾蔵は助手としてその制作にあたった。また助手を勤めながら、フランスやイタリアの美術館・博物館へ出向き彫刻の研究を続けた。

ある時、吾蔵が美術館で石膏のデッサンをしているのを見て、フランスの彫刻家ロダンが助手になるよう依頼してきた。しかし、吾蔵の芸術家としての資質はマクモニスの作風に近く、目指すものはそれであったので、その誘いを断った。

一九二二（大正元）年には、吾蔵はフランス国立美術学校エコール・デ・ボザールへ入学した。ここで、日本人初となる特待生になった。この頃、マクモニスが依頼を受けていた公共彫刻は、ニューヨーク市庁舎前の噴水彫刻『市民道徳』、ニューヨーク図書館玄関前の『美と哲学』等であった。



プリンストンの戦い記念碑  
1922（大正11）年設置  
ニュージャージー州  
プリンストン大学近郊公園内

## ●完全なる乳牛模型で表彰

一九一六（大正五）年、フランスからアメリカへ戻った吾蔵に、ミネソタの酪農家パブストが、理想的な体型の乳牛模型を依頼してきた。吾蔵はアメリカ・カナダ等の牧場を回って研究し、七年後に『完全なる乳牛模型』を完成させた。この作品は全米牧畜業大会で

表彰され、吾蔵は「牛のGOZO」と言われるようになった。

この模型はアメリカ・カナダ・ヨーロッパ・日本等の農科大学へ設置された。



ホルスタイン種乳牛 牝 1923（大正12）年  
川村吾蔵記念館所蔵

さらにこの頃、フランスで原型を制作していた『市民道徳』・『美と哲学』・『プリンストンの戦い記念碑』等はマクモニスと共同で拡大制作され、それぞれの場所へ設置された。一九三五（昭和10）年には、フシントン最高裁判所入口の『正義』も制作した。

## ●胸像制作で人間性表現

一九四〇（昭和15）年、日本の名のある人々の胸像制作を要請され、吾蔵は37年ぶりに帰国した。しかし、次の年には太平洋戦争が始まり、思うように制作は出来なかった。

一九四五（昭和20）年に敗戦となり、連合国軍としてアメリカ軍が進駐してきた。長野県の嘱託で通訳をしていた吾蔵が、アメリカで活躍した「GOZO」であることが将校に知られると、横須賀基地へ美術最高顧問として招かれた。吾蔵はここで将校たちの胸像等

を制作していたが、一九五〇（昭和25）年に65歳で胃癌で没した。

吾蔵は、交流のあった野口英世や島崎藤村を始め、片倉兼太郎、徳富蘇峰、尾崎聖堂、斎藤博大使、ヘレン・ケラー、マッカーサー等、名高い人々の胸像を造ってきたが、それは、優れた人々の「深い人間性」の表現を追い求めたからであった。

なお、二〇一〇（平成22）年四月に、龍岡城五稜郭の脇に市立の「川村吾蔵記念館」が開館した。

（丸山正俊）



島崎藤村  
1943(昭和18)年



マッカーサー元帥  
1949(昭和24)年

川村吾蔵記念館所蔵

## 参考文献

- 川村 吾蔵『履歴書川村吾蔵』
- 『正統なる造形GOZO』第一生命保険相互会社文化事業室
- 川村洋一郎『彫塑家川村吾蔵』白田町文化センター
- 飯沼信子『彫塑家川村吾蔵の生涯』舞字社
- 『没後50年川村吾蔵図録』長野県信濃美術館



## 佐久の先人たち⑫

### 平和と民芸を語り続けた教育者

こ ばやし た つ え  
**小林多津衛**

(1896～2001年)



柳宗悦<sup>やなぎむねよし</sup>や武者小路実篤<sup>むしやのこうじさねあつ</sup>の影響を強く受けた小林多津衛は、その精神を教育に生かし、民芸の普及と平和実現のために生涯をささげた。郡志<sup>へんさん</sup>編纂や天来研究はその後の地域文化発展に大きな役割を果たしている。

#### ●「自己を生かす教育」への道

小林多津衛は一八九六（明治29）年北佐久郡協和村天神（現佐久市協和）で、農業を営む小林治作・つるの四男として生まれた。高等小学校を卒業し代用教員を二年勤めたあと、長野県師範学校（現信州大学）に入学。務台<sup>むたい</sup>理作<sup>りさく</sup>にロマン・ロラン<sup>ろらん</sup>を薦められ、図書館で柳宗悦<sup>やなぎむねよし</sup>著「ウィリアム・ブレイク」に出会い、以後武者小路実篤<sup>むしやのこうじさねあつ</sup>・志賀直哉<sup>しかなおみ</sup>・柳宗悦<sup>やなぎむねよし</sup>らが主宰する雑誌「白樺」を購読するようになる。卒業後、武者小路が主宰する「新しき村」への入村を決意し、宮崎県日向

に向かったが、悪性の感冒<sup>かんぽう</sup>にかかって信州に戻った。当時信州には雑誌「白樺」の精神を教育に生かそうとする青年教師たちがいた。この「白樺教育」は、「自己を生かし、個性を尊重し、美を愛し、平和を求める」精神に貫かれていた。修身の教科書はさっと読む程度にして、子どもたちと武者小路や柳の著作などをガリ版刷りで読み合い、ミレーの複製画などを鑑賞した。

これが地元有力者や県教育委員会で問題になり、白樺教師たちは退職や休職を迫られ、転任も行われた。白樺教師の中心的存在だった赤羽王郎<sup>あかはねおうろう</sup>や、多津衛が親しかった中谷<sup>なかつ</sup>勲<sup>いさお</sup>らが教育界から追われた。多津衛も自分の知らないうちに休職願いが出されていたが、救いの手を伸ばしてくれた校長がいて、退職を免れた。

#### ●戦中の暗い時代

上伊那郡高遠尋常小学校にいた時、柳宗悦を招いて講演会を開いた。柳との交流が始まり、民芸への関心も深まって、この年に多津衛は初めて猪口<sup>ちぐち</sup>を購入した（のちに、猪口の蒐集は数百に及んだ）。

一九三三（大正12）年、布施尋常小学校に勤務。しかし信州の自由教育を排する動きが強まり、多津衛も転任をくり返した。一九三二（昭和6）年満州事変。軍靴<sup>ぐんか</sup>の足音が響く中で、一九三三（昭和8）年、当時教員赤化事件<sup>せいか</sup>といわれた「二・四事件」が起き、「白

樺教師」の仲間も何人かは検挙され、戦中は暗い時代を過ごした。一九四五（昭和20）年敗戦を迎えた時、多津衛は岩村田小学校長に補され、翌年北佐久教育会長に選ばれた。

#### ●マッカーサーへの手紙

敗戦後、極東軍事裁判が開かれ、日本の戦争犯罪の責任が問われた時、多津衛は連合国最高司令官マッカーサー元帥に手紙を書き、投函した。「この度の戦争は日本に大きな罪がある。しかし、連合国にもその原因がある。連合軍には日本を裁く資格はない。戦争犯罪は勝者も敗者も同罪ではないか」という内容で、占領下の日本では勇気のいる行動であったが、返事はなかった。多津衛には、国家の利益を超えて世界国家を展望することが平和への道だという考えがあった。□



小林多津衛百歳を祝う会。1996年8月、多津衛民芸館にて。当時日本民芸館長であった柳宗理<sup>むねみち</sup>（宗悦ご子息）の姿も見える。（多津衛民芸館所蔵）

マン・ロラン、ガンジー、シュヴァイツァーの影響も強く受け、後に「善意を世界に」「赤十字国家の提唱」という冊子を著した。

### ●郷土の文化発展を願う

一九四八（昭和23）年、長野県民芸協会佐久支部を発足させ、自ら支部長となった。戦後の貧しさと混乱の時代に、子どもや教師が日本の美しいものにじかに触れることが大切であると考え、七万円の資金を集め、日本民藝館長であった柳宗悦に民芸作品の蒐集を依頼し、七〇点余が届いた。それらをさまざまな会場で展示し、柳や、バーナード・リーチらを招いて講演会も開催した（現在、その作品は佐久教育会館に収蔵され、一部展示されている）。



松本民芸家具を育てた池田三四郎と対談。  
多津衛百歳。1997年5月、多津衛民芸館にて。  
（多津衛民芸館所蔵）

一九四九（昭和24）年北佐久町村会の賛同を得て、北佐久教育会が中心になり、「北佐久郡志」編纂に取り組んだ。この編纂事業は九年に及び、多津衛は編纂会責任者として、全四巻の刊行に尽力した。この「郡志」は全国的に高い評価を受け、後の郷土史研究や市町村史編纂の基礎を築いた。その後多津衛は郷里協和村に戻り、地元出身で現代書道の父といわれる比田井天来とその妻小琴の研究会を立ち上げた。この研究会が、後に「天来記念館」（現佐久市立）を建設する力となった。一九五八（昭和33）年、第一回佐久民芸展を開催し、毎年これ続けた。翌年には協和村公民館長を命ぜられ、地元住民たちとの交流や学習が始まった。

### ●八五歳から「協和通信」を刊行

一九八一（昭和56）年、八五歳を迎えてから、個人誌「協和通信」を創刊。翌年第三六回日本民芸協会全国大会において「核廃絶・軍縮の声明」を提案し採択され、協会内に「平和基金の会」が設置された。一九八三（昭和58）年「協和通信」発行と多年に亘る民芸研究により、第一回佐久文化賞特別賞を受賞した。

九四歳になって、しばらく休んでいた「協和通信」を再刊。その一号の巻頭で「君が正義に反することを、私が黙って君にそれをやらせておくとするれば、不正なのは私自身である。」というガンジーの言葉を

引用し、憲法九条があるのに軍拡が進められている現実を黙ってみているなら、

悪いのは私自身だから、この「再刊協和通信」で発言していくと書いた。この通信も数年続き、毎回数百通を発送した。一九九二（平成4）年より少年民芸夏期学校（上田民芸協会主催）が毎年開催され、ずっと校長を務めた。

一九九五（平成7）年、多津衛が蒐集した民芸の品々を展示し、多津衛の願いを長く語り伝えようと、「多津衛民芸館」（法人経営）が建設された。二〇〇一（平成13）年三月、一〇四歳の生涯を閉じた。民芸を愛し「白樺」の精神を貫いた人生であった。多津衛民芸館は今、多くの人が集い、語らう場となっている。

（吉川徹）

#### 参考文献

小林多津衛『善意を世界に・平和実現の具体化へ』

小林多津衛『美と真を求めて』用美社

小林多津衛『平和と手仕事 小林多津衛一〇四歳の旅』

ふきのとう書房

『平和と手仕事』一〇十六号 多津衛民芸館機関紙



佐久市望月御牧原に建つ多津衛民芸館



## 佐久の先人たち<sup>⑬</sup>

### のらくろ描いて半世紀

た がわ すい ほう

## 田河水泡

(1899～1989年)



戦前の小学校へ通った人なら、誰でも忘れないマンガは『のらくろ』だろう。主人公の『のらくろ』は、どこにもいるのらくろの黒吉。当時の子どもは兵隊ごっこが大好きという世相に乗って、『のらくろ』を兵隊に仕立て、10年にわたった連載、戦後篇を加えると、実に半世紀にわたる“マンガ劇場”だ。

伯父は絵を嗜み、寄席が大好きという趣味人で、いつも田河を連れて歩いた。ここで絵心と芸の面白さがはぐくまれた。

その伯父も小学校四年生のときに亡くなったので、小学校を卒業とともに薬屋に奉公し、「小僧」と呼ばれる住み込み店員となった。さらにメリヤス工場へと職を替え、二十歳になって兵隊にとられた。除隊後に好きな美術学校へ入ったものの、卒業したときは二十六歳。大正時代も終わりに近いころだった。

当時は不景気続きで、学校は出て職はなく、生活は苦しい時代だった。映画のポスターから看板描き、金になるなら何でもやった。「こんなことでは駄目になる」と感じ、職をかえることにした。

「何かないか」と盛り

場を歩いているうちに、

寄席に入った。そこでは

落語をしており、とたん

に伯父について行つた子

ども時代を思い出した。

「おれにも出来るかも…」

と、その夜早速、新作落

語を試しに書いてみた。

その原稿をおるおる

講談社に持って行つたと

ころ、同社発行の面白倶楽部の編集長が「面白い」といつて採用してくれた。そのうえペンネームも落語作家らしく「高沢路亭」とつけてくれた。

彼の落語原稿は次々に売れた。これで世渡りが出来ると自信がついたとき、編集者が「あなたはもともと絵かき。落語の滑稽ものと絵を組み合わせたら面白い」と、マンガを提案した。

少年倶楽部（講談社発行）に『のらくろ』が登場したのは、一九三二（昭和6）年の新年号だった。当時は世界恐慌にさらされ、農村も都会も生活難にあえいでいた。そんなときに頭に浮かんだのは、幼くして母と死に別れ、父親からも見離されて伯父夫婦に育てられ、貧しさのなかで生きてきた体験だった。それをそ



のらくろ連載第1号『のらくろ漫画大全』収録  
©田河水泡／講談社



のまま生かして、自分と同じように生きる子供たちを励まそうと考えた。主人公には子供が大好きな犬。こうして親もなく、ひとりぼっちの『のらくろ』が生まれた。

### ●好評で日本一の雑誌に

当時は少年倶楽部を毎月買ってもらえる家は少なく、雑誌は借りて読むという回し読みであった。

とくに故郷を離れ、都会の商店などに働きに出ている少年たちのために、自分の逆境を『のらくろ』の世界に再現した。孤独の『のらくろ』は金もなく、身寄りもない。日曜日になっても行くところがなく、野原にひとりしよんぼり。こんな姿が誌上に載ると「かわいそうだから僕の家においで…」という手紙が全国から講談社に殺到した。マンガの『のらくろ』は全国の少年たちの心をつかんだ。

田河ははじめ、軍隊と同じように『のらくろ』も二年で除隊させるつもりだった。だが一年ごとに階級があがるにつれ、少年倶楽部の発行部数も倍々ゲームのように増えた。そうなるに、止めるに止まらない羽目になった。『のらくろ』がスタートしたとき、三万部だった少年倶楽部は、一躍、50万部に伸びて日本一の雑誌となった。

このように少年倶楽部が伸びるにつれて、これを苦々しく見ていたのが、内閣情報局と軍部だった。一九



のらくろのグッズに囲まれた田河  
1935（昭和10）年頃自宅にて  
講談社提供

四一（昭和16）年にはいると、わが国の出版界は完全なる国家統制となった。この年の6月、出版用紙配給割当規定が設けられ、中央公論や改造など多くの雑誌が「時局を解せざるもの」として紙の配給をストップさせられた。こつした「言論の嵐」はマンガの世界にも及んで「名誉ある軍を、のら犬で風刺するとは…」と、暗に紙の配給の打ち切りを宣告された。少年倶楽部で10年10か月（昭和6年1月号〜16年10月号）、国民から愛された『のらくろ』は国家機関によって抹殺された。

### ●戦後は喫茶店のマスター

戦後の『のらくろ』は軍事雑誌の『丸』に復活した。

マンガは再登場の『のらくろ』に召集令状がきて、猛犬連隊に復帰、山猿軍との戦争に従軍した。だがこの戦いも間もなく解決して平和となり、復員した『のらくろ』も、戦後の苦しい世の中を体験した。

職業もはじめは保険の外交員をしたが成績が上がらず、露天商や、旅館の番頭などを経験した。最後は喫茶店のマスターとなってやっと安定、結婚もしたところで、一九八〇（昭和55）年、『のらくろ』に終止符をつけた。

思えば一九三一（昭和6）年、『のらくろ二等卒』としてスタートからちょうど50年、半世紀にわたる長期シリーズであった。

一九九（平成11）年の「田河水泡生誕百年」を記念して、佐久市との合併前の臼田町の有志たちがのらくろによる「町おこし運動」を計画、『のらくろ会』の結成を呼び掛けた。その結果、町内はじめ松本、上田など県内各地から五百人を超える会員が集まり、講演会や『のらくろ』展示会を開催した。

（中村勝実）

#### 参考文献

田河水泡ほか3人『芸術家の独創』

日本経済新聞社（日経ビジネス人文庫 私の履歴書）

中村勝実『近代佐久を開いた人たち』機

肖像写真提供

田河水泡・のらくろ館

## 佐久の先人たち<sup>⑭</sup>

### 農村女性の解放に 生涯をささげた

まる おか ひで こ  
**丸岡 秀子**

(1903～1990年)



土に根を張って生きる女たちに、秀子は自分の思いをやさしく、時にきびしく教えてくれ、それは母親のような存在だった。

評論や多くの執筆を通して、心から平和を願い命の大切さを説いた。

で酒造業を営む父井出今朝平、母ツギの長女として生まれた。だが、生後十か月で母と死別、以後幼少期を中込村（現佐久市中込）の農家であった母方の祖父小林億二郎、祖母喜井のもとで過ごすことになる。

小林家は代々名主の家柄であったが、江戸時代の水争いの折、曾祖父が村人を救うために幕府と対抗したことから財産を没収され、貧しい暮らしを余儀なくされていた。どんなことがあっても断乎として正義を貫く曾祖父の反骨精神は、そのまま秀子にも受け継がれていく。

#### ●生きる原点に「農」

一方、朝早くから夜遅くまで一日中ただ忙しく働きづめの祖母喜井の姿や、また大家族の商家に嫁ぎ二十四歳の若さで逝った母ツギのことなどから「農村女性の解放なくして真の解放なし」という女性の生き方を心に刻み、これは生涯を通じての叫びとして形づくられていった。

北に浅間山、南に八ヶ岳・蓼科山を、そして浅間山に向かつて真直ぐ流れる千曲川、こうした佐久の大自然の中、生家も望める臼田稲荷山公園（現佐久市）に一九九六（平成8）年丸岡秀子の碑が建てられた。「浅間山は私の恋人」と言いきる秀子の感性は、この豊かな故郷の自然の中で育まれた。

碑文の『読むこと 書くこと 行うこと』は、百冊をこす著書のなかのどこにも見当たらない言葉だが、これこそまさに秀子の生き方そのものであるといえる。

秀子は一九〇三（明治36）年臼田町（現佐久市臼田）

は平均点九六点というすばらしさで、長野高等女学校（現長野西高校）へ進学。そこでの寄宿舎生活では、学業以外にある新しい出会いが夢を大きくふくらませた。常に優れた成績をおさめる秀子は、一九二〇（大正9）年知事の推薦によつて奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）文科に入るが、教育方針の一部に納得のいかない思いを抱いた。



奈良女子高入学当時 前列右端が丸岡  
『ひとすじの道を生きる』（ドメス出版）より

そんな折、堂々と平和・命・自由人権思想などを実践している富本憲吉・一枝夫妻を知つて積極的に富本家を訪ね、夫妻の相互敬愛の生き方に目覚めていった。

卒業後、三重県亀山女子師範学校に教師として赴任するが、担任する一生徒の退学処分に対し、生徒をがばつて自ら退職した。身を挺して生徒を守り抜いた工ピソートとなっている。

## ● 生涯の中で

一九二五（大正14）年、上京した秀子は富本一枝の紹介で知りあった丸岡重堯と結婚する。「勉強は一生するもの」との夫の信条のなかで共に学び、居ながらに経済・社会・婦人問題などを身につけていった。その後長女明子の誕生と順風満帆の日々を送っていたが、出張先で感染した腸チフスで夫が急逝し、生活は一変する。

暮らしを支えるために下宿人を置き、家庭教師などしながら産業組合中央会調査部に勤務、消費者運動や農村婦人の実態調査などに参加する。時には子連れで全国町村を歩いての行動は、理論ではない実践に基づいたものとして「日本農村婦人問題」の著書に結実させた。一九三〇（昭和5）年である。

このち奥おめお、平林たい子らと知り合い朝日新聞社月曜クラブのメンバーとなり、また平塚らいてう、田村俊子らと読売新聞婦人欄コラムのレギュラーとなり、日本農業新聞、信濃毎日新聞などにも執筆した。その力量を存分に発揮し、ふつうに生きる女たちに、新聞の投稿欄をはじめ、いろいろの場での思いを人生の証しとして書くことを教えていった。

どんな時も、どんな人にも対等に物を言いきちんとした言葉でぶきあっていく生き方が、同僚であった石井東一の心を動かし、一九三七（昭和12）年東一と再

婚、北京に渡る。長男龍一も誕生するなかで、石井は執筆し行動する秀子のよき理解者として、最後まで応援しつづけた。



新日本婦人の会代表委員たちと  
左から丸岡秀子、平塚らいてう、勝目テル、  
櫛田ふき、小笠原貞子 1967（昭和42）年  
『ひとすじの道を生きる』（ドメス出版）より

## ● 「ひとすじの道」を執筆

著作活動はいよいよ進み、六八歳のとき自伝的小説「ひとすじの道」全三部作を執筆。生いたちから結婚に至るまでの心の内面を、恵子という主人公に託して悲しみ、辛さ、さびしさをのりこえていく姿をわかりやすい言葉で表現。読書感想文課題図書となつて次代の子どもたちの心を打った。

二〇〇六（平成18）年には「丸岡秀子・ひとすじの道」として映画化され、更に広く世に知られていく。数ある講演では、第二十回母親大会での席上「母親がかわれば社会がかわる」と訴え、満場の女性たちの感動と共感を呼び多くの婦人実践者を育てていった。



母親大会での記念講演  
1972（昭和47）年  
日本母親大会連絡会提供

一九八六（昭和61）年最愛の娘明子を失う。その切なさを余すことなく「声は無けれど」に綴りながらも強く生きて行く。

決して体制におもねず、命を守ること、平和を願うことや人権尊重の姿勢を貫いて一九九〇（平成2）年その生涯を閉じた。

碑文にしろされた思いを多くの人とのお会いの中で実践した秀子の生涯は、現在を生きる女性たち一人ひとりの心の中に「光」となつて輝いている。

（佐々木都）

## 参考文献

丸岡秀子追悼文集編集委員会『いのちと命を結ぶ』

信濃毎日新聞社

丸岡秀子『ひとすじの道』3部作 偕成社

『ひとすじの道を生きる』写真集 ドメス出版

『読むこと・書くこと・行うこと』碑建立記念誌 ほか

## 肖像写真

『ひとすじの道を生きる』(ドメス出版)より



## 佐久の先人たち⑮

### アンデルセンやムーミンを 日本に紹介した詩人

やま むろ しずか  
**山室 静**

(1906～2000年)



旧制野沢中学を卒業後、小学教員を経て上京。職を転々とした後、東北大学文学部卒業。日本女子大学教授を勤めながら、神話や昔ばなし等の研究を続け、北欧諸国の児童文学を紹介。ムーミン・シリーズを訳して「ムーミンを連れてきた人」と呼ばれる。

#### ●影法師のように

山室静は、一九〇六（明治39）年に父の任地鳥取市で生まれた。父は長野師範と二松学舎を終えて各地の中学教諭を歴任。母は少女期に岩村田の英学塾に通い、長野県尋常女子師範を卒業後、断続的に小学教諭の職に就いていた。静は七人兄弟の四男。

一家は父が富山県魚津中学に赴任するに伴い魚津に転居し、母が二期から長野市の小学校に転任するため、小学一年生の静と弟妹は母と長野市に移る。翌年三月、父が仆れたと知らされて母は魚津へ駆けつけた

が、父は程なく息を引き取った。

父の没後一週間ほどの間に、母は、四人の男児を、伯母たちの婚家にそれぞれ託し、三人の子供たちと母の生家へ引き揚げて志賀小学校に転動した。静の預けられた家の伯母は、封建道徳と礼節を固守して静に接した。

岩村田小学校二年から野沢中学校（現野沢北高校）一年までの養家の生活を、後に静は、「人の厄介にならず、厄介をかけず、人生の裏通りを影法師のように通り過ぎるのを望みとした」と回想している。



山室静少年時代

一方、静は、中学五年のときに着任した国語教師の和合恒男の印象を「まるで天窓を開かれたようにさわやかで清新なものだった」と書いている。和合との遭遇こそが、静をして、西行、芭蕉、良寛に親しみ、島崎藤村、西条八十、北原白秋に傾倒させて詩を書き始

める動機になったのだろう。静は六冊もの詩集を遺したが、そこに収めた「少年詩篇」と名付けた詩の多くは、この期を含む一〇年ほどの作と打ち明けている。

「影法師のように」と書く侘びしかった少年期の体験は、生涯ついに静のころから離れなかったのだろう。エッセイ集と詩集には昆虫や植物観察を好む孤独な少年の姿と呟きが繰り返し登場している。

#### ●一七年ぶりの帰郷

上京後の静は、夜学や語学の講習会に通い、一九三三（昭和8）年、友人たちと『明治文学研究』『プロレタリア科学』『マルクス・レーニン主義芸術学研究』等の編集を手伝う。当時左翼文化団体はすべて弾圧されて機関誌の編集者だった静は、数度、勾留され酷い拷問を受けた。が、マルクス主義は、藤村や、小川未明や宮沢賢治の農民詩から学んだ、生の哲学に融発されたヒューマニズムを否定するものと考え、マルクス主義を放棄した。三〇歳で結婚してから、東北帝国大学法文学部（現東北大学文学部）美学科に入学。やがて、仙台市にも空襲の危険が迫り、長女の小学入学が重なったため、家族を岩村田へ疎開させ、研究室に残っていた静も、一九四四（昭和19）年三月岩村田に帰り、野沢高等女学校（現野沢南高校）に就職するも、敗戦後に退職して、一家は小諸町の借家に転居した。

## ●ふるやうへのエール

静は、戦時中の教師体験から、小さな学塾をつくる  
うと考え、郷里の友人井出一太郎、木内謙一らと諮つ  
て、デンマークの国民高等学校の例をも参照し、「地  
方文化の啓発・向上に資する機関たらしめん」と、浅  
間国民高等学校（別称・高原学舎）設立趣意書を印刷  
し、有志一八名からなる設立後援会も生まれた。

井出の岳父の好意で製糸会社とその宿舍の建物が提  
供され、一九四六（昭和21）年の入学式には、一〇〇  
人ほどの学生・生徒が参集した。彼らに大きな期待を  
抱かせたのは、教師席の田部重治、片山敏彦、橋本福  
夫ら著名な学者たちの姿だった。が、翌年には学制改  
革で新入生がなく、高原学舎は一年半で閉校となった。



第1回佐久文化賞受賞式 1983（昭和58）年  
前列左から若月俊一、井出一太郎、山室静、小林多津衛

それから  
三〇年後、  
静は「郷里  
の文化と人  
材育成のた  
め、佐久地  
方で地道に  
創作や研究  
に従事して  
いる人たち  
を対象に若

干の賞金を提供して、労に報いるため」と書いて、上  
述の井出と連名で佐久文化賞の設定を諮った。会員は  
二三名。毎年、佐久文化賞を贈つて、静の没後は、山  
室静・佐久文化賞と改称。二五回重ねて二〇〇八（平  
成20）年に解散した。

この間も、静は県内の文学同人誌を通じて後進の指  
導につとめて、物心両面の尽力を惜しまなかった。度  
重なる市立図書館への蔵書の寄贈（山室文庫）。岩村  
田小学校と野沢中学校の校歌の作詞。一九七五（昭和  
50）年には、先の大戦下、学徒動員された野沢高女の  
生徒たちの手記『16歳の兵器工場』を編んだ。この回  
想記は〈戦争の証言シリーズ〉の一冊として、毎日出  
版文化賞特別賞を受けた。

かつて静は「信濃は私の故郷であり、他郷にあつて  
もつねに心ひかれてふるさとであつた」と書いた  
が、信濃における静の動静を支え共にしたのは、木内  
謙一、井出一太郎両氏であった。高原学舎、佐久文化  
会議は両氏なくしては成り立たなかつただろう。

## ●文学業績

山室静は文学者で、本人は詩人と呼ばれると本望ら  
しい。一九六一（昭和36）年、ユトレヒトで開催され  
た国際比較文学学会出席のため、北欧など十か国を歴訪  
の途次に求めて帰国後訳出した『ムーミン童話全集』  
（全九巻）は〈ブーム〉と呼ばれるほど話題になった。

『北欧文学の世界』、『アンデルセンの生涯』（毎  
日出版文化賞）、『評伝森鷗外』、『島崎藤村ー生涯  
と言葉』、『シュワイツァー愛と思索の生涯』等々約  
一〇〇冊。翻訳書は約一五〇冊余り。生前に、平林た  
い子賞（第一回）、川崎市文化賞、神奈川文化賞、先  
達詩人顕彰状を贈られた。



山室静はムーミンシリーズや、アンデルセン童話  
など、多くの作品を翻訳した。  
（写真の作品は全て講談社刊）

一九九四（平成6）年には、市民の厚意で岩村田の  
木もれ陽広場に「故郷」の詩碑が建立されて、車いす  
ながら元気で出席した。

（荒井武美）

## 参考文献

『山室静著作集』全六巻 冬樹社  
『山室静自選著作集』全一〇巻 郷土出版社  
荒井武美『山室静とふるやう』一草社

## 佐久の先人たち①⑥

### 日中友好に尽した文学者

たけうち よしみ

# 竹内 好

(1910～1977年)



太平洋戦争の応召直前に『魯迅』<sup>ろじん</sup>を執筆、戦後は岸信介内閣による新安保条約強行採決に抗議して東京都立大学教授を辞任するなど、近代日本のありかたを中国との関係のなかで問い続けた現代中国文学者。

#### ●太平洋戦争と著書『魯迅』

竹内好は、一九一〇（明治43）年一〇月二日、南佐久郡臼田町臼田（現佐久市）に生まれた。父伊藤武一は、松本中学校（現松本深志高校）卒業後、税務署員として臼田に居住し、竹内家に入籍した。母起よしは、東京の渡辺女学校を卒業した才媛で、静かに深く考える慎重な性格は、起よしに似ているといわれる。

三歳の時、父の転勤により東京に移住し、東京府立第一中学校（現日比谷高校）・大阪高校（現大阪大学）をへて、東京帝国大学文学部支那文学科に入学した。

在学中に、『司馬遷』<sup>しばせん</sup>の著者として知られる武田泰淳らと中国文学研究会を結成し、一九三七（昭和12）年から二年間、日中戦争下の北京に留学した。

陸軍に召集される直前の一九四三（昭和18）年、竹内は、最初の著書である『魯迅』を、明日の命すらわからない状況のなか、遺書に近い気持で執筆する。

魯迅（一八八一—一九三六年）は、清朝を倒した辛亥革命<sup>がひかくめい</sup>（一九一一年）後も西洋列強や日本の侵略と支配に苦しんだ中国にあつて、封建制でも西洋近代でもない「第三の時代の創造」を訴えた人物である。他者から支配されることを拒み、また他者を支配することによって自らが解放されることをも拒む魯迅の態度に、竹内は「抵抗の主体」を見出し、『魯迅』を描いた。

一九四五（昭和20）年、湖南省岳陽<sup>くわんしやうがくしやう</sup>（現岳陽）で敗戦を迎える。それより以前、太平洋戦争を支持する「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」を『中国文学』に書いた竹内は、のちに「よるこびと、悲しみと、怒りと、失望のまざりあつた気持」で迎えた八・一五は「私にとって、屈辱の事件だった」と回想した。

太平洋戦争で日本が敗戦したことではなく、日本のファシズムや中国との戦争を防ぐことができなかったことを「屈辱」と記す竹内は、以後、中国への罪責感<sup>ざいせいかん</sup>を強くもちつつ、その生涯を中国文学研究に尽す。

#### ●抗議の辞職

一九六〇（昭和35）年五月、竹内は、岸信介内閣による衆議院での新安保条約強行採決に抗議し、「憲法の眼目の一つである議会政治が失われた」と、東京都立大学（現首都大学東京）教授を辞職した。新安保条約が日中国交回復の障害になることに加え、アメリカに追随して中国を敵視する、日本という独立国家の



親友であった武田泰淳（右）と対談する竹内（左）  
筑摩書房提供



主体性に対する抗議であった。

その後は、雑誌『中国』を一〇年にわたり発行し、晩年は、『魯迅全集』の完訳に専念し、一九七七（昭和52）年三月三日、六七歳の生涯を終えた。

### ●「信州第一主義」と臼田

竹内と同じく旧臼田町出身で、中央公論社編集者時代から竹内と交流のあった作家の井出孫六は、「うちの亭主は『男は信州、漬物は信州、みそ汁は信州、何でも信州だ』と言って聞かないような人でした」という夫人の回想を紹介し、「家ではとにかく、信州第一主義“であった」と述べている（二〇〇八年一月一日付『信濃毎日新聞』）。



自宅書斎でくつろぐ竹内 筑摩書房提供

だが、意外なことに、竹内自身が信州のことを直接記した文章は少ない。

しかし、信州とりわけ臼田に対する想いは熱い。竹内は、『佐久教育』第一〇号（昭和50年3月）によせた「佐久を思う」という文章で、次のように述べている。

「私と佐久の結びつきは、この臼田へのたまさかの帰郷がほとんどその全部である。（中略）しかし、定住を別にして、立寄る回数が一番多いのは、なんと言っても佐久である。一回の滞在が数日からせいぜい十数日であるにせよ、過去六十年間二十回か三十回は臼田との間を往復しているはずである。生活を経験しないために郷土感がつすい。しかし、逆に、もし生活していれば偏屈な私のことだから反逆していたかもしれない。やはり故里は遠きにありて思つほつがよい。干曲の流れと浅間の景観は自分の精神の一部に血肉化されていることは否めないように思う」

### ●魯迅『故郷』の翻訳者

現在中学校国語教科書で採用されている魯迅の短編小説『故郷』は、竹内好『魯迅文集』（筑摩書房）に収録された訳本が底本として使用されている。

『故郷』は、かつて地主であった主人公が、今は没落してしまった生家の家財を引き払つために、二〇年ぶりに故郷に帰ってくるところから話が始まる。主人公の想いの中で美しかった故郷はすっかり色あせていた。

『故郷』に描かれた主人公の生家の没落や故郷からの退去は、魯迅自身の経験がもとになっているといわれる。「故里は遠きにありて思つほつがよい」とする竹内と魯迅の想いは、ここでも一体となっている。

（伊藤純郎）



魯迅に関する竹内の著書  
魯迅文集（筑摩書房）・魯迅（講談社）

### 参考文献

竹内好『「信州と旧友と私」』『潮音』一九六一年一月号  
『思想の科学』第九一号（竹内好研究号）思想の科学社  
鶴見俊輔『竹内好ある方法の伝記』岩波現代文庫

肖像写真提供  
筑摩書房

## 佐久の先人たち⑰

### 農民とともに 地域に生きた医師

わか つき とし かず  
**若月俊一**

(1910～2006年)



わずか20床の農協病院に赴任した若月俊一は、地域の人々のために寝食を忘れて診療し、健康管理活動や農村病の研究も進めた。彼の「弱い立場の人たちと生きる」精神は地元の熱意にも支えられ、ベッド千余床、職員1900人の病院に発展させた。若月の名は、農村医療と農村医学の開拓者として、国内だけでなく、海外にも知られる。

#### ●民衆のために生きる決意

若月俊一は一九一〇（明治43）年、東京に生まれる。東京府立第一中学校（現日比谷高校）から旧制松本高校（現信州大学）を経て、一九三一（昭和6）年、東京帝国大学医学部に入学した。

松高時代はプロレタリア文学や哲学書を読みふけり、マルクス主義に心ひかれていく。東大在学中、共産主義運動にかかわり、無期停学処分を受けたが、この間若月の中に培われた「ヴ・ナロード」（人民の中へ）、「民衆のために」の精神が、後に佐久の地で生かされることになる。

ることになる。

一年後に復学を許された若月は、一九三六（昭和11）年に医学部を卒業したが、希望するとこの医局からも入局を断られる。失意の若月を受け入れてくれたのが、東大分院外科の大槻菊男教授であった。若月は外科医としての技術と学問を身につけて、民衆の役に立つ医者になろうと決意する。

一九三九（昭和14）年、医局から派遣された石川県の病院で、軍需工場の患者の工場災害に関心を寄せる翌年、医局に帰った若月は、東京近辺の軍需工場に向いて「工場災害」の研究に没頭する。その研究結果を専門誌に発表し、一九四三（昭和18）年に、著書「作業災害と救急処置」（東洋書館）を出版したことで、その内容が治安維持法に違反するとして、警視庁に逮捕される。

一年間拘禁され、釈放された若月は、大槻教授の勧めで、佐久病院に外科医長として赴任する。一九四五（昭和20）年三月、太平洋戦争が終戦を迎える半年ほど前のことである。

#### ●佐久に赴任して

佐久病院は、当時の南佐久郡下三ヶ町村の産業組合（農協の前身）が、「農民のための病院を、自分たちの手で作ろう」と、資金を出し合って、終戦の前年に開設したばかりの病院であった。その設立の趣旨に

共鳴した若月は、この佐久で農民の健康を守るために働くことを決意する。

佐久地域には外科医がおらず、外科医としての診療は、たちまち多忙を極めた。あらゆる手術をこなさなければならず、それまで一人もいなかった入院患者も急増した。そんな中で若月は、病院に来る患者に手遅れの病人がたいへん多いことに気付く。

当時の農村では、民間療法などに頼って、病気を手遅れにしてしまう患者が多く、若月はその手遅れを防ぐと、休日を利用して無医地区への出張診療を始めた。同時に、正しい病気の知識や衛生思想を普及しようと、診療の後に衛生講話や、自ら脚本を書いて、演劇活動も行なった。病院祭の開催もそのひとつである。



病院祭の若月院長にものを聞く会場では、  
たくさん質問に答える（1985年）  
佐久総合病院提供

なお、その演劇活動は、後に佐久病院が展開する文化活動の先駆けとなったが、かつての文学青年若月は、劇団部のために二〇篇を数える脚本を書いている。

### ●農村医学の確立

一九四六（昭和21）年一〇月、若月は院長に就任し、「地域の中へ」「農民とともに」を合言葉に、農村医療の確立にいつその力を注ぐ。

出張診療活動を重ねる中で、「健康手帳」と「健康台帳」による村ぐるみの健康管理の構想が生まれ、一九五九（昭和34）年、八千穂村（現佐久穂町）で実現する。村と病院が一体となったこの全村健康管理事業で、若月が主張する「予防は治療に勝る」ことが実証された。これは長野県全域を健診隊が巡回する「集団健康スクリーニング方式」の健診活動に発展していった。



農村婦人の疲労実態調査で、農作業中の現場を訪れる（1971年） 佐久総合病院提供

また、不潔な環境やきびしい農業労働に起因する寄生虫病や「こづで」（手指の腱鞘炎）、「農夫症」など、農村特有

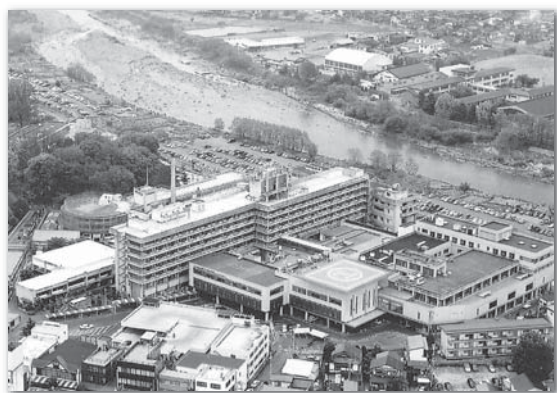
の病気について研究しようと、長野県農村医学研究会を設立した。これが後に、全国組織である日本農村医学会に発展し、医学界に「農村医学」という研究分野が確立された。若月は、この組織の国際的連携にもつとめ、一九六九（昭和44）年に第四回国際農村医学会議を、一九七三（昭和48）年には第一回アジア農村医学会議を佐久病院で開催している。

こうした健康管理活動や研究活動をおして、地域住民のニーズを的確にとらえ、病院本来の機能の向上にもつとめた。伝染病棟や精神神経科病棟の建設をはじめ、診療科の増設、分院の設置など施設を拡充し、この佐久で最高の医療が受けられるようにとの思いから、最新の医療器械や技術も積極的に導入した。

### ●千床を超える中核病院に

高度経済成長期以後、変貌する農村の中で、農業中毒など新たな農業災害や、高齢化問題にも早くから目を向けた。全国に先駆けて老人保健施設を開設、老人の在宅医療を中心とする地域ケア活動を展開した。これらの功績により、アジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を一九七六（昭和51）年に受賞するなど、多くの賞を受けた。

設立時二〇床でスタートした佐久病院は、いま千床を超え、第一線医療から高度専門医療までを担う、地域の中核病院に発展した。いっぽう若月は、「病院づ



佐久総合病院全景 佐久総合病院提供

くりは、地域づくりと結びついてこそ本当の発展がとげられる時代になった」として、一九九四（平成6）年の第四八回病院祭で「佐久総合病院の将来構想

―夢とロマンをもって―の私案を発表している。こうして若月は、つねに「夢とロマン」を追い求めた。二〇〇六（平成18）年八月二日、若月は、佐久が「農村医療のメッカ」と呼ばれようになる大きな足跡を残し、九六歳で永眠した。

（内田直人）

### 参考文献

若月俊一『村で病氣とたたかう』岩波書店  
若月俊一『信州の風の色』旬報社  
南木佳士『信州に上医あり』岩波書店  
「佐久病院史」作製委員会『佐久病院史』勁草書房  
肖像写真提供  
佐久総合病院



## 佐久の先人たち⑱

### 清廉一筋の歌人政治家

い で い ち た ろ う  
**井出一太郎**

(1912～1996年)



三木内閣の官房長官だった井出一太郎は、閣議の席で岩波文庫の「日暮硯」を配った。これは信州松代藩の家老恩田木工が財政窮乏のなか、その改革に当たったときの記録。国政に当たる者もこれを経緯の書として必読をすすめた。歌もよむ文人政治家らしい政治姿勢だ。

広の学生。大学の門衛も教授と思い敬礼したという。

みすず刈る科野の真三折りすてて

この日たまたまいつの日あらむ

井出が政界出馬を決意したのは、終戦の玉音放送だった。戦後第1回の総選挙に出馬して当選。以来40年清廉一筋で16回の連続当選を果たした。その間、片時も歌を離さず、一貫して貫き通した政治姿勢は「保守のなかの革新」であった。

井出の初入閣は石橋湛山内閣の農林大臣だった。このとき先輩の松村謙三は前任農相の河野一郎と比較し、「河野は資本家の農政だが、井出は農民の農政だ」(『戦後歴代農相論』より)と井出に期待を寄せた。

それより以前、記録的冷害の年に衆議院農林委員長として、救農国会“で大活躍の井出を評価しての発言だ。当時の自民党は俗に“八個師団“ともいわれ八つの派閥があった。井出は政策集団の三木・松村派に属し、国内では農業基本法の立案、国際的には中国との国交回復に取り組んだ。

中国問題では党内が二分され、タカ派はアジア問題研究会(AA研)、ハト派はアジア・アフリカ研究会(AA研)にまとまった。AA研は松村謙三を中心に藤山愛一郎、井出一太郎、古井喜実、川崎秀二らがり

ーダーだった。

こうした松村・井出らの動きにこたえ、政界も順次「中国への門を開け」の聲が高まった。それがニクソン米大統領の中国電撃訪問で、我が国も一挙に国交正常化へと進んだ。

これを機に全国組織の日中友好協会が設立され、現在この副会長が井出の長男正一(元厚相)。親子二代にわたって日中友好に“大きな橋“をかけた。



内閣のスポークスマンとして記者会見

### ●大内山の初春を飾る歌

一九七四(昭和49)年、金脈問題に対する世論の批判で田中角栄内閣が総辞職、自民党副総裁椎名悦三郎の裁定で、後継は三木武夫内閣となった。この官房長官に選ばれたのが井出である。党内では反主流だ、傍

### ●玉音放送で政界決意

井出は臼田町(現佐久市臼田)の生まれ。家は三百年前から続く酒造業で、井出は十人兄弟の長男だった。一九三二(昭和6)年、旧制松本高校(現信州大学)を卒業したが、農村恐慌で家業の酒も不景気で売れない。そこで大学進学をあきらめ、家業の酒づくりに没頭する。

それから10年後、学問への郷愁絶ち難く、京都大学で学びながら毎週、京都と臼田を往復する“金帰月来“で家業も続けた。彼は学生服のなかで、ただ一人の背

系だといわれて苦節29年、はじめて手にした政権の座であった。

嶺きにいま辿りつき思へるは

遠くはるけく踏み越えしみち

三木政権は保守体制の二つのタブーに挑んだ。政治資金規正法の強化と独占禁止法の改正である。

これまで制限なしだった企業からの政治献金を、資本金の額に応じて限度額を設けたことは三木政権フリン政治の功績の一つだった。



衆議院予算委員会で答弁

だが独占禁止法の改正は「自由主義経済を否定し、自民党をつぶす気か」と党内、財界から猛反対を受けた。そのうえ、ロッキード事件の発覚から国民世論を

バックに真相究明に熱意を示す三木に対し、党内は田中同情論が横行、「三木には惻隱の情がない」と、逆に三木おろしさえはじまった。

母まさは大内山に初春の

けふの節会のよし告げ麻之乎

一九七八（昭和53）年1月12日、新春恒例の宮中行事である歌会始で、歌をよみあげる講師は、この年の召人である井出の歌を朗々と読みあげた。

歌会始は宮中における年始めの歌会で、古くは毎年の定めではなかったが、一八六九（明治2）年からは毎年1月に行われ、天皇、皇后が出席、国民の詠進歌のうち秀逸作が披露される。また特に一人が召人として選ばれ、応制歌を献上することになっている。

政治家が召人として選ばれたのは、一九二二（大正10）年の床次竹二郎以来、57年ぶりのことだった。

### ●選挙民に贈った色紙

それから7年後、衆院議長の交代にあたり、自民党執行部はその第一候補に井出を推した。

これにクレームをつけたのが田中とその周辺だった。政治倫理問題が議題にあつて、ロッキード事件で有罪の判決を受けた田中の議員辞職勧告案などが国会で取り沙汰されようとしているとき、政敵三木の女房役、

井出の議長には賛成できないという。

世論も「さわやかな議長」と好感をもって迎えられだが、実現出来なかった。

その後の井出は白内障、緑内障とたび重なる目のわずらいに悩まれ、政界引退を決意する。

一九八六（昭和61）年2月11日、彼の引退を惜しむ選挙民三千八百人が小諸市民会館をつめた。

その一人ひとりに、井出が政治生活のしるしと贈ったのは、60年間親しんできた三十一文字の色紙だった。

四十年の歩みは短かからなく

酬いることの未だ足りざる

（中村勝実）



色紙をしたためる井出

### 参考文献

寺山義雄『戦後歴代農相論』富民協会  
中村勝実『佐久の代議士』樂  
中村勝実『信州の大臣たち』樂

# 佐久の先人検討委員会からのお知らせ

## 第二次の先人18人を選定しました

- |                                 |                                    |
|---------------------------------|------------------------------------|
| ・ 民衆のために年貢減免を訴えた義民<br>小林 孫左衛門   | ・ 佐久に自動車交通網を築いた<br>小池 森太郎          |
| ・ からまつを育苗し普及させた<br>松本 谷 吉       | ・ 命の尊さを説いた軍医<br>小池 勇 助             |
| 清水 清 吉                          | ・ 3000人以上の赤ちゃんをとりあげた助産師<br>柳 本 みつの |
| ・ 明治政府に尺度統一を建白した<br>市川 又 三      | ・ 用水改修や発電所建設にあたった政治家<br>森 泉 武 重    |
| ・ 郷里で多くの門人を育てた漢学者<br>依 田 稼 堂    | ・ 御牧原台地の水利事業に尽力した政治家<br>中 澤 周 三    |
| ・ 明治から大正にかけて活躍した石版画家<br>岡 村 政 子 | ・ 開業医のかたわら山国の自然を詠んだ俳人<br>相 馬 遷 子   |
| ・ 信州財界の危機を救った銀行家<br>瀬 下 清       | ・ 誠意をもって労働争議を収束させた経営者<br>田 中 文 雄   |
| ・ 小海線全通に生涯をかけた政治家<br>篠 原 和 市    | ・ 地域医療を推進した浅間病院初代院長<br>吉 沢 國 雄     |
| ・ 佐久の文化と産業を支えた<br>神 津 猛         | ・ 人間国宝に認定された陶芸家<br>松 井 康 成         |

佐久の先人検討委員会は、平成23年度に選定し発表した第一次の先人18人に引き続き、第二次の先人として上記の18人を選定しました。

今後は上記の方々の業績や佐久とのつながりを分かり易くまとめていく予定となっています。

## 今後紹介してほしい先人を推薦してください

### ・ 選定の考え方

- ①江戸時代以降の人 ②物故者 ③佐久の歴史、風土、生活を支えた人  
④市民やこどもに語り継ぎたい人など

以上4点を基本として先人の推薦を募集しております。

### ・ 推薦書の内容

- ①推薦したい先人の氏名、出身地 ②推薦理由や先人の経歴・業績  
③参考にした本（文献・資料）の名称など

以上3点を記入し推薦して下さい。（任意の様式で結構です）

### ・ 推薦書の提出先及びお問い合わせ先

文化振興課 〒385-0043 佐久市取出町183 野沢会館内  
☎62-0664 FAX64-6132  
Eメール：bunkasisetsu@city.saku.nagano.jp